

# 四ツ役遺跡

平成7年度

青森県教育委員会



# 四 ツ 役 遺 跡

－八戸平原開拓建設事業（農道建設）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 7 年度

青森県教育委員会



## 序

新井田川の流域には、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

八戸平原開拓建設事業は、昭和48年11月に事業計画が提示され、青森県教育委員会では昭和53年度から埋蔵文化財の分布調査を行い、翌年度から発掘調査を実施して、その記録保存を図ってまいりました。

この度、八戸平原開拓建設事業(農道建設)に伴う三戸郡南郷村四ツ役遺跡発掘調査の成果がまとまり、刊行することになりました。

調査の結果、縄文時代中期から晩期の住居跡や遺物が出土し、本遺跡は、縄文時代中期から晩期にかけての集落跡であることが分かりました。

調査の結果が広く文化財の保護と研究に活用され、地域社会の歴史や埋蔵文化財を学習する資料になれば幸いに存じます。

ここに、日頃から埋蔵文化財の保護に対しご理解を賜っている農林水産省東北農政局八戸平原開拓建設事業所並びに南郷村、同村教育委員会及び発掘調査の実施から報告書の作成まで種々御指導、御協力を頂いた関係各位に対して、厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐



# 例　　言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成6年度に発掘調査を実施した八戸平原開拓建設事業（農道建設）に係る南郷村四ツ役遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の遺跡登録番号は、65031番である。
- 3 本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は文末に付した。
- 4 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 5 遺構の規模に関する計測値は、各遺構の妥当と考えられる部位を計るようにした。
- 6 土層の注記は、「新版標準土色帖」（小山、竹原；1993）を参照した。
- 7 資料の鑑定・分析等は、次の方々に依頼した。  
　　遺跡周辺の地形地質　松山 力（八戸市文化財審議委員）  
　　石器の石質鑑定　　松山 力（八戸市文化財審議委員）  
　　伊藤 昭雄（青森県埋蔵文化財調査センター）
- 8 本書に記載した地形図（遺跡の位置と周辺の遺跡）は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地図を複写したものである。
- 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 図中で使用したスクリーントーンの表示は、次の通りである。



焼土・磨り



敲打



凹み

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第Ⅱ章 調査の方法と経過	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査の経過	4
第Ⅲ章 遺跡の環境	5
第1節 遺跡と遺跡周辺の地形・地質	5
1 遺跡の位置と周辺地域の地形	5
2 遺跡周辺の地質概要	7
3 遺跡の土層序	7
第2節 周辺の遺跡	9
第Ⅳ章 調査の概要	15
第1節 検出遺構と遺構内出土遺物	15
1 積穴住居跡	15
2 土坑	16
3 溝状ピット	21
4 屋外炉	22
5 埋設土器遺構	22
第2節 遺構外出土遺物	36
1 土器	36
2 石器	37
3 石製品	37
第Ⅴ章 まとめ	44
引用・参考文献	44

写真図版

報告書抄録

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

国営八戸平原開拓建設事業は、縄文時代の昔から人々が暮らし、生活を営んできた八戸市、階上町、南郷村、及び岩手県輕米町の4市町村にまたがる広大な地域を国の農業農村整備事業の一環としてとらえ、総合農地開発事業として昭和48年11月に、農林水産省東北農政局から事業計画が提示され、事業は昭和51年から開始されたようである。

事業は、受益者で構成する土地改良区の総意の下に地域住民、市町村、県、国が一致協力して進められ、土地改良法という法律に基づいて実施されている。事業の内容は、農地開発、ダムの建設、道路網の整備、農地の区画整備、灌漑用施設の充実などを目指している。この事業は、当初、昭和50年度から57年度まで施工予定であったが、その後施工期間の変更があったようである。

昭和48年12月、東北農政局八戸平原開拓建設事業所から、当該開発事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があり、当教育委員会は周知の遺跡30箇所の所在を回答すると共に、可能な限りの現状保存を申し入れた。その後、前記30遺跡の現状確認調査の依頼が出されたが、当教育委員会ではこの機会に、当該区域内の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の見直しを兼ねた広域分布調査を計画した。

昭和53年度に国庫補助を受けて、4月24日から23日間にわたり、関係市町村の調査対象面積17,600haを踏査して、周知分も含めて115の遺跡の所在を確認した。

昭和54年6月、昭和54年度施工予定地区内に所在する三戸郡南郷村前平(2)遺跡外4遺跡併せて、4,300m<sup>2</sup>の埋蔵文化財発掘調査の依頼があった。

同年9月1日付けで、東北農政局長と青森県知事が協定書を取り交わし、青森県教育委員会（文化課）が発掘調査を実施することになったが、結果的には前平(2)遺跡外3遺跡、3,500m<sup>2</sup>が昭和54年9月1日から同年10月31日まで調査された（県埋文報第64集：1981）。

昭和55年度は、同じような経過をとどり、9月1日から10月28日まで、階上町志民(2)遺跡（860m<sup>2</sup>）と南郷村田ノ上遺跡（817m<sup>2</sup>）の発掘調査が行われた（第65集：1981）。

平成元年10月17日、3回目の発掘調査の依頼があって、県教育厅文化課が担当することになった。世増ダム建設に伴う南郷村地区の周知の遺跡は畑内遺跡だけであったが、12月20日、21日に再度分布調査を行ったところ、畑内遺跡の範囲は拡大し、世増地区で新たに砂子遺跡、楓ノ木遺跡、筋久辻遺跡の3箇所が発見された。

平成2年4月17日、東北農政局と青森県が協定を締結し、教育厅文化課は5月7日から八戸市沢堀込遺跡の発掘調査を実施した。面積は8,500m<sup>2</sup>で年度内に終了の予定であった。しかし、試掘調査を先行して全体の確認を急いだところ、遺跡の範囲が拡大するとともに、工事に係る面積が大幅に増加し、発掘の必要な面積が19,000m<sup>2</sup>に達することが判明した。このため、両者間で協議を行い、平成2年度は13,000m<sup>2</sup>を調査することとし、11月5日まで実施した。畑地造成に伴う調査である。

平成3年4月15日、東北農政局と青森県が協定を締結し、教育厅文化課は5月7日から八戸市沢堀

込遺跡の発掘調査を開始し、8月30日に終了した（第144集）。

平成3年度には、これ以外に2遺跡の発掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターが実施した。

農地造成に伴う階上町野場(5)遺跡発掘調査は、平成3年5月7日から同年9月27日まで（6,300m<sup>2</sup>）行われた（第151集）。

次いで、平成4年度には当初、南郷村砂子遺跡の発掘調査が予定されたが、諸般の事情によって急遽同村畠内遺跡に変更になった。

畠内遺跡の第一次調査は、平成4年5月6日から同年11月13日まで実施され、調査面積は5,016m<sup>2</sup>（内、試掘1,800m<sup>2</sup>）であった（第161集）。遺跡の南側を試掘調査（範囲確認）した結果、面積は66,000m<sup>2</sup>になることが判明した。

畠内遺跡の第二次調査は、平成5年5月10日から同年8月27日まで実施され、調査面積は4,840m<sup>2</sup>であった（第178集）。遺跡に至るルートは、岩手県経米町長倉を経由するものであり作業効率は低下した。

以上のような経緯があって、平成6年度の八戸平原開拓建設事業（農道建設、世増ダム建設）に係る南郷村四ツ役遺跡、畠内遺跡発掘調査が開始される訳であるが、それに先立ち教育庁文化課では、平成5年11月14日から同月18日まで、四ツ役遺跡の試掘調査を行い（346m<sup>2</sup>）、幹線農道予定地から主として縄文時代後期・晩期の遺構と遺物を検出していた。

（北林 八洲晴）

## 第2節 調査要項

### 1 調査目的

八戸平原開拓建設事業（農道建設）の実施に先立ち、当該地区に所在する四ツ役遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

2 発掘調査期間 平成6年7月27日(水)から同年9月22日(木)まで

3 遺跡名及び所在地 四ツ役遺跡（県遺跡番号65031）  
三戸郡南郷村大字島守字崎ノ木沢11、13

4 調査面積 1,680平方メートル

5 調査委託者 東北農政局八戸平原開拓建設事業所

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 南郷村教育委員会、三八教育事務所

9 調査参加者

調査指導員	村越 漢	弘前大学教授（現、青森大学教授）（考古学）
調査協力員	高畠 繁昭	南郷村教育委員会教育長
調査員	瀧澤 幸長	八戸市文化財審議委員 （考古学）
	松山 力	八戸市文化財審議委員 （地質学）
	上村 四郎	南郷村歴史民俗資料館研究員 （考古学）
	向谷地芳久	八戸工業大学第一高等学校教諭 （考古学）
	小林 和彦	八戸市郷文學習館（八戸市博物館分館） 主査兼学芸員 （動物考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

総括主幹	
調査第一課	課長 北林 八洲晴（現、副参事）
	総括主査 木村 錢次郎（現、主幹）
	主事 水谷 和恵
調査補助員	斎藤 正宏、成田 和世 村越英二郎、米田 洋子

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

グリッドの設定は、遺跡内の道路建設用中心杭No.21を基準としてD-15と称した。この基準点と別の道路建設用中心杭No.19とを結ぶ直線（東西線）を基準線として4m×4mのメッシュを組んだ。グリッド番号は南北ラインを北から南へ向かってアルファベットを付し、東西ラインを西から東へ向かって算用数字を付して用い、グリッドの名称は北西隅の交点を使用することとした。測量原点は、道路建設用地内にある工事用測量原点からレベル移動を行い、調査区域に数箇所設置した。

調査は1グリッド毎に数地点を掘り下げ順次拡幅していく。また、遺構の検出されなかった調査区際のグリッド数箇所を深掘りし、土層の堆積状態を観察した。

遺構の調査は、確認順に番号を付して精査した後、二分法・四分法を用いた。遺構内出土遺物は必要に応じてポイント、レベルを記入した。実測は造り方測量を用い縮尺は20分の1を原則とし、必要に応じて10分の1の縮尺を用いた。包含層出土遺物については、グリッド毎に層位を確認しながら取り上げた。写真撮影は、35mmのモノクローム、カラーリバーサルの2種類のフィルムを使用して、作業の進展にともない必要に応じて行った。

### 第2節 調査の経過

平成6年7月27日、調査機材を搬入し発掘調査を開始した。まず調査区域内の草刈や道具小屋設営等の環境整備を行うと共にグリッド設定作業を行い、設定区域から順次掘り下げを開始した。

調査区域内に排土置場が確保できなかったため、調査区の東側から先に掘り下げ、排土をいったん西側に置き、東側の調査が終了した後に排土を東側に移動して西側の調査を行う、という計画が組まれ、計画にしたがって、東側から先に調査は行われた。

表土を剥ぐと、縄文時代中期～晩期にかけての土器片や、土師器片が出土した。ただし削平を受けているため、ほとんどが細かな破片であった。さらに調査を進めるにつれて住居跡、土坑等の遺構が検出され、さらに粗掘を拡大していく。

8月下旬、調査委託者のほうから、調査委託者所有の土地に排土を置いてもよいという連絡を受け、重機とトラックによる排土の移動を行い、終了後、粗掘の範囲を西側の地区に拡大していく。西側の地区からは新たな住居跡や溝状ピットなどの遺構が確認された。

9月13日、発掘調査関係機関の担当者、調査指導員、調査員等の出席のもとに、福地村中央公民館において、西張(3)遺跡と合同での調査打合せ会議を行い、会議終了後調査現場を踏査し、現段階までの成果を見学し、その後の調査の方法について指導を受けた。

第IV層（南部浮石層）の下層にも新たに数箇所トレンチをいれ、調査をしてみたが、遺物、遺構共に発見されなかったため、これより下層には遺跡は存在しないと判断し、当初の予定通り9月22日、無事調査の前日程を終了した。

（水谷 和憲）

## 第三章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡と遺跡周辺の地形・地質

松 山 力

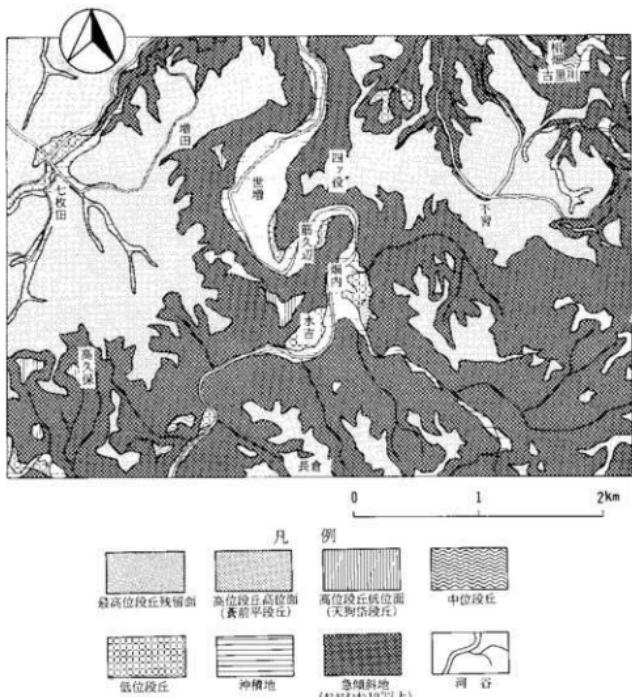
#### I 遺跡の位置と周辺地域の地形

四ツ役遺跡は、不習（東方1km余）・田山（東方2km付近）周辺から、新井田川とその支流の古里川の間を、北方の島守盆地南縁までのびる丘陵地（蒼前平段丘）の西縁部の一部が、やや内側に湾曲した嘴型の半島状に、南南西方へ突き出す尖端の根元に位置している。丘陵面の海拔高度は170～230m程度であるが、遺跡付近では広い上位面とごく小規模な下位面に分かれている。遺跡は、尖端部へ、上位の丘陵面から分岐してのびる低位面の、高度175～190m程度の南向き緩斜面にある。分岐部分の東から北へは、上位の丘陵が尾根状に張り出している、遺跡の北側はその南斜面の下縁で画される。上位面と下位面の高さ差は10～20m程度で、間の段丘崖は崖というほどの急な斜面とはなっていない。遺跡の南縁は、遺跡の東200m付近の谷頭から南側を下るごく小さい谷の北側斜面である。この谷は遺跡の南縁まで西南西に下ったあと、方向を南南西に変え、遺跡の200mほど先で、新井田川の落差90m余りの断崖に達する。西南西にのびる下位面に平頂部の軸は、遺跡の300mほど先で南南西に折れ、両側を急崖で挟まれた平頂面のほとんどない尾根に変わって、新井田川に突き出している。

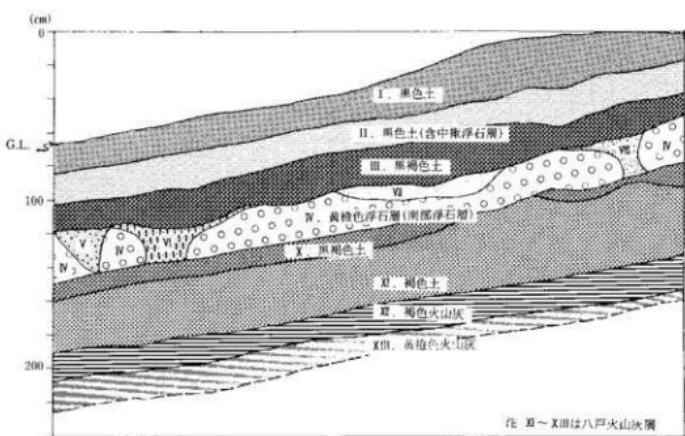
遺跡の西南西方から真西300m付近までの平頂部の外縁は、60～70mの急斜面となって、新井田川に沿う世増盆地に落ちている。この急斜面は真西から東に折れ、遺跡から100mほどまでに迫り、遺跡の北縁に接する上位丘陵面の先端部斜面との間に谷壁をつくり、そこからは高さ差100m以上の急斜面部となって北東へのび、遺跡の北方400mほどから、北に向かう新井田川の流れに断崖を落として北方へと続いている。遺跡の南300m付近から南南西に遠ざかり、再び西方を回って北上する新井田川の幹川（主流）は、上流の岩手県側で瀬月内川と呼ばれ、源流を岩手県山形村平庭岳中腹に発して、遺跡の北北東16kmの八戸湾に達する幹川流域延長84kmの二級河川である。遺跡南南西3km付近で最大支流の雪谷川と合流した新井田川は、行きつ戻りつするように曲がりくねりながら周囲の丘陵地帯を深く刻み込む渓流となって、北方2～3kmに開ける島守盆地までを流れ下っている。途中の、遺跡南方1.5km付近の左岸の岩手県水吉と、1km付近の右岸の青森県畠内とには、それぞれ200～300m四方程度の小規模な盆地が隣接し、遺跡の西側の急崖（段丘崖）下にはやや広い世増盆地が開けている。

遺跡直近域の新井田川は、水吉付近から北上し、前述のように、南方300mまで接近したのち、左回りに反転して南南西1km程度まで遠ざかり、遺跡から南南西に半島状に突き出す丘陵地の尖端から再び反転するよう折れて北西に向かい、西南西900m程度のところで北東に向きを変えて、北北西400mから蛇行を繰り返しながら島守盆地へと抜けている。世増盆地は遺跡から南南西に突き出す丘陵地の急崖と、西南西方で北北西から北東に折れる新井田川の流路に囲まれた三角形の盆地で、南北方向を三角形の底辺に見立てると、底辺の長さ約1km、高さ（東西方向）400m程度の沖積地である。

遺跡周辺に広がる丘陵は、いったん幅をかなり狭めたあと、遺跡北方1.5km付近から2.5km付近にかけての島守盆地の南側の地域に続いている。新井田西方の七枚田周辺では、同様の丘陵地がかなりの



第1図 遺跡付近の地形区分図



第2図 土層断面図

範囲に広がっている。丘陵地と新井田川の谷底部との高度差は80～150mにもなり、新井田川流路に急傾斜の谷壁や断崖を落としているところが多い。

これらの丘陵は、東方の階上岳北麓に広い平坦地をつくり、西に向かうにつれ起伏に富む丘陵地へと趣を変えながら、遺跡の周辺地域まで広大に広がる蒼前平段丘に相当する。

## 2 遺跡周辺の地質概要

周辺地域の基盤は、先第三紀の石灰岩・チャート・粘板岩・砂岩・輝緑凝灰岩などである。その上には、砂礫・砂・シルト・粘土などの段丘堆積物がのり、これを褐色火山灰（ローム）層や幾枚かの火山碎屑物層を挟む黒色土類が覆っている。川縁の低位段丘の堆積物も最低位面を除いて、黒色土類に覆われる。

より高位の段丘ほどより古い褐色火山灰層までのせるが、周辺地域の最高位段丘に相当する蒼前平段丘には、基本的にすべての褐色火山灰層がのっている。

周辺地域の黒色土層類には、南部浮石層・中振浮石層・十和田b降下火山灰（ばらつき）などの火山碎屑物がみられる。また、埋没した小谷や遺構などの凹地の覆土や湿原性堆積物中には、十和田a降下火山灰層・苔小牧火山灰層などが残されている場所が多い。畠内や水吉の低位段丘は、12000～13000年前に十和田火山から噴出した八戸火山灰流凝灰岩（シラス）で構成される、いわゆるシラス台地である。

それぞれの火山噴出物の年代は、大池昭二、町田 洋あるいはその他の研究者によって、八戸火山灰層やその浮石層（ところによって火山灰流）は12500～14000年前、南部浮石がほぼ8600年前頃、中振浮石がほぼ5500年前頃、十和田b降下火山灰が繩文時代晩期末葉ないし弥生時代初頭、十和田a降下火山灰がA.D.915年とされる。そのうち中振浮石層については、近くの畠内遺跡で円筒下層a式土器を多量に含む土層が直上にのることが確認され、一方岩手県二戸市中曾根遺跡では大木1式相当の土器や大木2式土器をともなう遺構（竪穴住居跡）を中振浮石層が覆うことが報告されている。十和田b降下火山灰層は、新郷村の畠内遺跡で繩文晩期のすべての型式の土器を覆うことが明らかにされている。

## 3 遺跡の土層序

遺跡の土層は、地表から下へ、I層からXII層までの13層に区分された。第2図は土層断面の一部を示したものである。

I層は厚さ16～34cmの黒色（10YR2/1）表土層である。場所によっては下半部が粒径2～5mmの堅い灰白色（10YR8/1～2）浮石を含み、また微細な白色の鉱物粒が多量に混入してやや砂質となっているところがあり、上半部と区別して2層に区分できる。灰白色浮石は十和田b降下火山灰の浮石が散らばったものである。微細な白色鉱物の混入は、繩文時代晩期から奈良・平安期にかけての土層の特徴である。

II層は厚さ12～30cmの黒色（10YR2/1）土ないしは黒褐色（10YR3/1）土で、中振浮石層の浮石砂（砂粒大的浮石）が混じっている。第2図の断面にはみられなかったが、発掘部の西方では連続する中振浮石層が確認されている。黄色系の色調をもつ中振浮石層は、遺跡を含む周辺地域では厚さが10～20cmで、浮石砂の密集した崩れやすい火山灰層として、黒色土層中に挟まれている。

IIIは厚さが12~35cmで、黒色(10YR2/1)ないし黒褐色(10YR2/2)の砂質土で、粒径2~6mmの黄橙色(10YR7/8)浮石が散らばり、下部ではやや密集する。浮石は下位の浮石層に由来したものである。

IV層は、粒径3~10mmの浮石が密集する、厚さ20~42cmの黄橙色(10YR7/8~8/8)浮石層で膠結が進んでいないので崩れやすい。間隙は砂粒大から数mm程度の粒径の黒色岩片や浮石砂で満たされている。この浮石層は南部浮石層である。IV層は随所に数10cm以内(多くは10~20cm)の間隔の切れ目があって、その切れ目に厚さ20~30cm程度のV~IX層が詰まっている。これらの層は、ところによつては切れ目の上部から横に広がり、南部浮石層の上縁を覆って広がる薄層となっている。

V層~IX層はそれぞれ、V層は黒色(7.5YR2/1)、VI層は黒褐色(7.5YR3/2)、VII層は極暗褐色(7.5YR2/3)、VIII層は暗褐色(7.5YR3/4)、IX層は黒褐色(7.5YR2/2)の土層で、多量の浮石を混入している。この浮石は南部浮石に由来する。

X層は厚さがふつう6~12cmで、粒径2~8mmの浮石を散らばす黒褐色(7.5YR3/2)土層であるが、ところどころでレンズ状に尖滅している。

XI層は厚さ30~55cmの褐色(10YR4/6)土層で、粒径数mm程度の浮石をまばらに含む。

XII層は厚さ20cm以内の褐色(7.5YR4/4)砂質火山灰層(ローム層)、XIII層は厚さ20cm以上の黄橙色(10YR6/4)砂質火山灰層(ローム層)で、八戸火山灰層の上部にあたる。

#### [引用・参考文献]

- ・青森県教育委員会 1994 「畠内遺跡Ⅰ」 青森県埋蔵文化財調査報告書 第161集
- ・二戸市教育委員会 1981 「中曾根II遺跡発掘調査報告書本文編」
- ・町田洋、新井房夫、森脇広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』vol.51 No.9

## 第2節 周辺の遺跡

四ツ役遺跡は、青森と岩手の県境に近い新井田川流域に位置して、その周辺には多くの遺跡が分布している。

平成4年3月に青森県教育委員会から発行された『青森県遺跡地図』及び平成7年度に県教育庁文化課が刊行した『平成7年度 青森県の文化行政』(55頁)によると、三戸郡南郷村の遺跡(埋蔵文化財包蔵地)の件数は、231箇所となっている。現在、この数字は、県内67市町村の遺跡件数の第4位、県内遺跡件数の5.6%に相当する。

国営八戸平原開拓建設事業は、南郷村の外に八戸市、階上町、岩手県軽米町を含めた4市町村にわたる広大なものである。これらの市、町で周知されている遺跡件数は、八戸市-268箇所、階上町-73箇所、岩手県軽米町-17箇所(世増ダム建設関連のみ)、「岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」(岩手県教育委員会1990)である。今後、事業の進展とともに埋蔵文化財関係の調査はますます増加するものと予想される。昭和53年の南郷村内における遺跡数は、僅かに48箇所であったが、二つの国家的大事業が計画されてから今日のような遺跡件数になったようである。その後、国営八戸平原開拓建設事業関連の試掘・発掘調査は昭和54年から開始され、南郷村前平(2)遺跡、外長根(1)・(4)・(5)遺跡、田ノ上遺跡(県64・65集:1981)、筋久辺遺跡(県151集)、畠内遺跡(県161・178集)、四ツ役遺跡、砂子遺跡、楢木ノ木遺跡、水吉遺跡について実施されている。また、東北縦貫自動車道八戸線建設事業関連も昭和54・55年度から開始され、右エ門次郎窪遺跡、三合山遺跡、石ノ窪(1)・(2)遺跡(県69・92集)、馬場瀬(1)・(2)遺跡(県70集)、鶴平(1)遺跡(県72集)の7箇所である。そしてそれぞれの遺跡では、相当の考古学的な成果が得られている。

南郷村における遺跡の時期的な傾向を概観すると、縄文時代早期から近世まで認められるが、その割合は、縄文時代早期が約50%、後期約20%、前期約10%、中期約8%の割合となっている。

遺跡の分布は、村内全体に散在しているが、遺跡の集中している度合いを見ると新井田川流域の密度が濃く、しかも大規模な遺跡も残存している。約66,000m<sup>2</sup>と推定されている畠内遺跡はその典型的な例である。この遺跡は、現在のところ、縄文時代前期と弥生時代前期の集落跡が発見されている。

新井田川流域で古くから著名な遺跡として、八戸市是川中居遺跡がある。縄文晩期の遺跡で昭和32年に国史跡に指定されている(是川石器時代遺跡)。ここから出土した主な遺物は、八戸市縄文文学館(博物館分館)に展示され、分かり易い解説書としては『北の誇り・亀ヶ岡文化』(国説 ふるさと青森の歴史シリーズ③:1993)が知られている。最近の発掘調査では、是川中居遺跡の近くに所在する八戸市風張(1)・(2)遺跡が注目されている。昭和63年・平成元年に実施された調査結果によれば、縄文・弥生・奈良・平安時代に大規模な集落が営まれたことがわかり、さらに、東北北部では調査例の少ない平安時代後半環濠集落が発見されるなど考古学上多くの貴重な成果が知られている(八戸市埋文報第42集:1991外)。

縄文時代中期後半の大集落(住居跡24軒、上坑37基、捨て場1箇所など)では、八戸市西長根遺跡がある。平成4年に調査され、市街地の中心部から南東へ約4.5km、新井田川と松館川に挟まれた標高27~45mの高齢段丘上に立地している(八戸市埋文報 第61集:1995)。

これらに代表される新井田川流域の大きな集落は、本報告書に収録されている四ツ役遺跡と時期的

に重複している時期が認められることから、川の流域によって地理的に、あるいは地縁的なつながりがあつただけでなく、血縁的な人の系譜が時の流れや川の流れと共にそこには存在した可能性を考えても不思議ではなかろう。

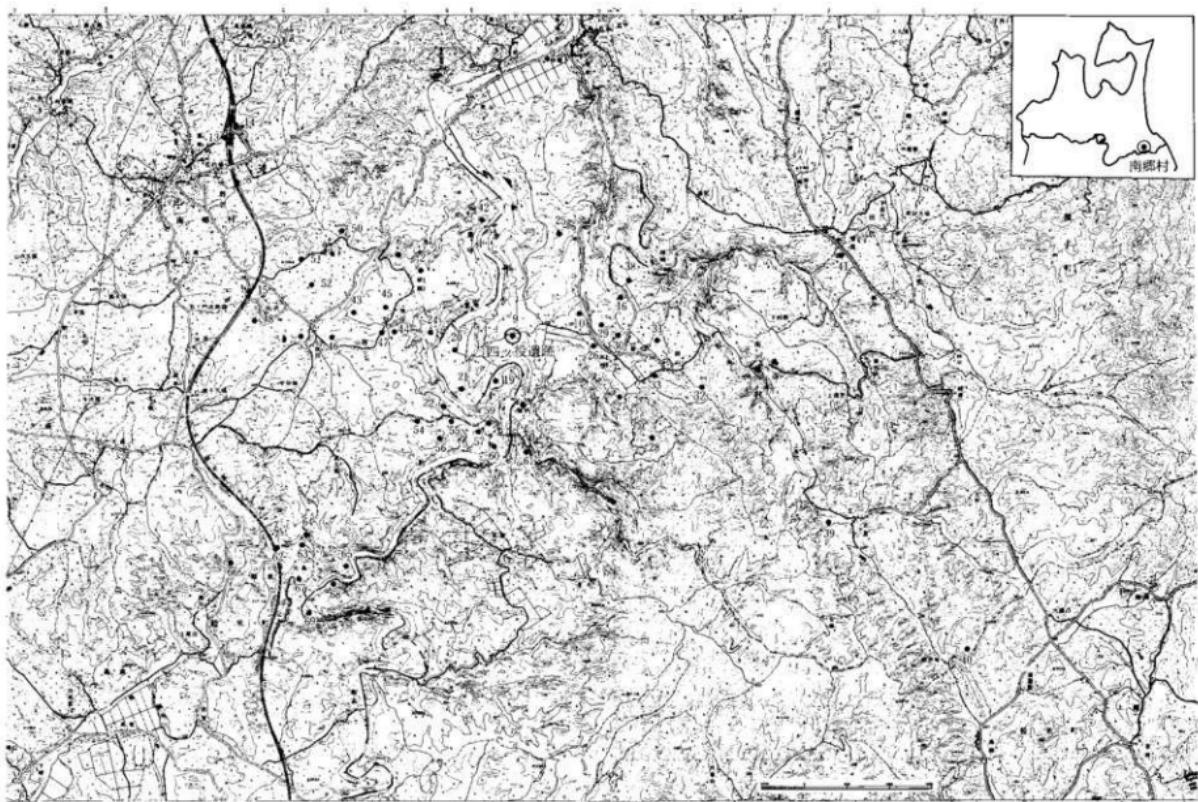
一方、岩手県の新井田川水系に属す世増ダム建設関係の遺跡は、縄文時代のものが大部分のようなので、本県にある遺跡とは十分交流が行われたと考えられる。周辺の遺跡を取り上げて考える場合は、その辺を十分考慮する必要があると思うが、今のところそれらの報告書を拝見する機会に恵まれていないので、今後の課題としたい。

(北林 八洲晴)

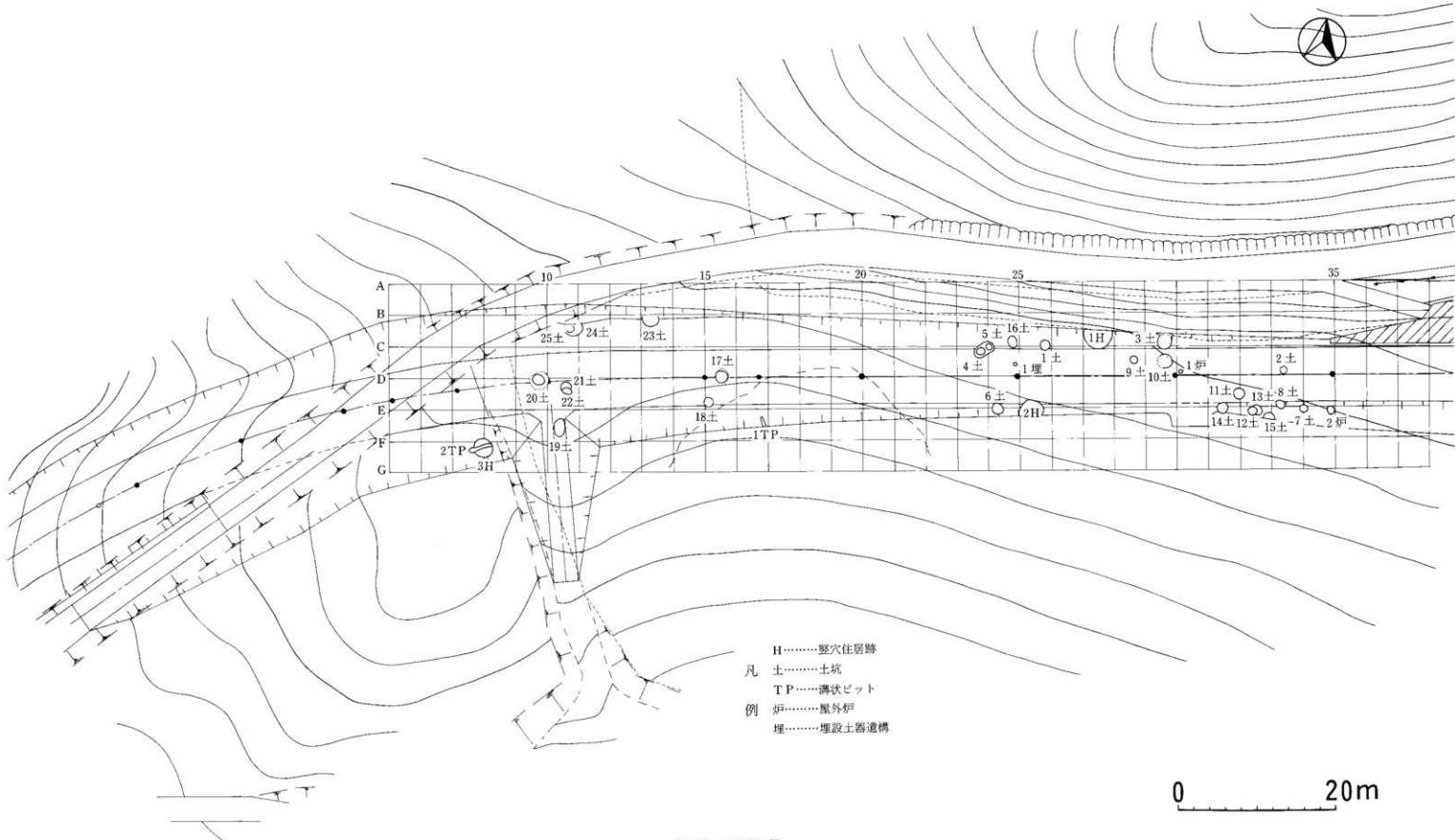
第1表 四ツ役遺跡周辺の遺跡

No 番号	遺跡 名	通路名	沿石層	縄文時代				弥生 時代	吉備 時代	奈良 時代	平安 時代	中世	近世	種別	文献
				草原階	早期	前期	中期								
1 5	南郷村高山(1)			○	○			○						散布地	
2 28	南郷村状脛(2)			○				○						散布地	
3 2	南郷村環内			○	○	○	○	○	○	○				集落跡	県161・178・187集
4 44	南郷村向山				○	○								散布地	
5 16	南郷村松石撫				○	○	○		○					散布地	
6 27	南郷村状脣(1)					○	○				○			散布地	
7 8	南郷村荒谷			○			○	○						散布地	
8 9	南郷村三合山					○	○							集落跡	S55発掘、県69集
9 31	南郷村西四役					○	○	○						集落跡	県6発掘、県188集
10 33	南郷村田ノ上			○	○	○	○	○		○	○			集落跡	S55発掘、県65集
11 56	南郷村馬場塚(1)			○	○		○	○						集落跡	S55発掘、県70集
12 57	南郷村馬場塚(2)			○	○		○	○						○	土坑、溝状ビット、散布地
13 35	南郷村石ノ塙(1)						○			○				○	土坑群、散布地 S35、58発掘、県69、92集
14 51	南郷村石ノ塙(2)			○			○							○	集落跡
15 34	南郷村右ノ門次郎庭			○	○	○	○							集落跡	S55発掘、県89集
16 63	南郷村外山長根(1)			○	○	○	○			○	○			○	土坑 8基 同上
17 64	南郷村外山長根(2)				○	○								散布地	同上
18 61	南郷村前平(2)			○		○	○	○						土坑群(26基)	同上
19 227	南郷村第久辻			○	○	○	○				○			○	土坑、是外村、キャンプ・サイト H38発掘、県151集
20 226	南郷村砂子					○					○			煙跡、散布地	昭文センター調査
21 228	南郷村楓ノ木					○					○			散布地	同上
22 229	南郷村木青			○	○	○	○	○						散布地	H7文化課試掘
23 4	南郷村江花沢										○	○		同上	
24 225	南郷村世増踏跡											○		踏跡	
25 32	南郷村持金沢					○	○							散布地	
26 59	南郷村田ノ上(2)				○	○	○							散布地	
27 36	南郷村野塚(2)					○	○							散布地	
28 29	南郷村野塚(1)					○	○							散布地	
29 34	南郷村池下(1)					○	○	○						散布地	
30 35	南郷村池下(2)						○	○						散布地	
31 36	南郷村池下(3)						○	○						散布地	
32 38	南郷村鶴木沢(1)						○	○						散布地	

No.	遺跡 番号	遺跡名	旧石器	萬文時代				弥生 時代	古墳 統攤文	奈良 時代	平安 時代	中世	近世	種別	文献
				草創期	早期	中期	後期								
33	58	南郷村冷水				○	○								散布地
34	65	南郷村猿穴				○	○								散布地
35	66	南郷村鶴木洞(2)		○	○										散布地
36	67	南郷村鶴木洞(3)				○									散布地
37	68	南郷村壁下(3)		○	○										散布地
38	62	南郷村八森長塚				○				○					散布地
39	49	南郷村若宮			○	○									散布地
40	41	南郷村亮井坂				○									散布地
41	42	南郷村田代			○	○									散布地
42	1	南郷村下山							○	○					集落跡
43	24	南郷村増田(1)			○	○									散布地
44	25	南郷村増田(2)			○	○									散布地
45	26	南郷村増田(3)					○								散布地
46	230	南郷村北の畠		○		○	○								散布地
47	53	南郷村山田				○									散布地
48	13	南郷村田の沢				○	○								散布地
49	3	南郷村市野沢菴子(1)				○	○								散布地
50	68	南郷村市野沢菴子(2)					○								散布地
51	69	南郷村蓬折向					○								散布地
52	70	南郷村鳥森					○								散布地
53	71	南郷村佐野塚				○				○					散布地
54	232	軽米町水吉(1)					○								散布地
55	233	軽米町水吉(3)					○								散布地
56	234	軽米町水吉(4)					○			○					散布地
57	235	軽米町水吉(5)						○							散布地
58	236	軽米町長倉(4)						○							散布地
59	237	軽米町水吉(2)						○							散布地
60	238	軽米町水吉(6)						○							集落跡
61	239	軽米町長倉(5)						○							散布地
62	240	軽米町大島(5)						○							散布地
63	241	軽米町人島(4)						○							散布地
64	242	軽米町大島(3)						○							散布地
65	243	軽米町人島(2)						○							散布地
66	244	軽米町下尾(川2)						○							散布地
67	245	軽米町人島(1)						○			○				集落跡
68	246	軽米町長倉(6)						○							散布地
69	247	軽米町長倉(7)							○						散布地
70	248	軽米町長倉(8)							○						散布地



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡



## 第IV章 調査の概要

### 第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

検出遺構は竪穴住居跡3軒、土坑25基、溝状ピット2基、屋外炉2基、埋設土器遺構1基である。以下にその概要を述べる。

#### 1 竪穴住居跡

##### 第1号住居跡（第5図）

- 〈位置〉 B・C-27グリッドに位置する。
- 〈確認〉 暗褐色土の落ち込みとして確認した。
- 〈重複〉 なし。
- 〈規模〉 東西3.92m、深さ34cm。
- 〈平面形〉 北半分ほどが調査区外にかかっているため、正確には把握できなかったが、ほぼ円形になるものと思われる。
- 〈覆土〉 9層に分層された。
- 〈壁〉 床から外傾して立ち上がる。傾斜は幾分急である。ただし、南側の壁は把握できなかった。
- 〈床〉 やや凹凸が見られる。
- 〈炉〉 床面のやや南側に、東西56cm、南北76cm程の石囲炉がみられた。石組みの中には焼土が確認された。
- 〈柱穴〉 本住居跡からは12個のピットが検出された。それぞれの深さは、Pit 1-13cm、Pit 2-33cm、Pit 3-18cm、Pit 4-32cm、Pit 5-8cm、Pit 6-15cm、Pit 7-13cm、Pit 8-7cm、Pit 9-25cm、Pit 10-10cm、Pit 11-7cm、Pit 12-10cm。
- 〈施設〉 なし。
- 〈遺物〉 第15図1は、縄文時代後期初頭のものと思われる粗製の深鉢形土器である。単節の斜縄文を施文する。第15図2は、小型の深鉢形土器の底部で、無節の縄文を縦位に施文する。いずれも覆土からの出土である。
- 〈小結〉 本住居跡は、出土遺物から、縄文時代後期頃のものと思われる。

##### 第2号住居跡（第5図）

- 〈位置〉 D・E-25グリッドに位置する。
- 〈確認〉 黒色土の落ち込みとして確認した。
- 〈重複〉 なし。
- 〈規模〉 東西2.37m、深さ28cm。
- 〈平面形〉 住居の南側が調査区外にかかっているので正確には把握できなかったが、やや不正な隅

丸方形になるものと思われる。

〈覆土〉 1層である。自然堆積と思われる。

〈壁〉 床から外傾して立ち上がる。傾斜はかなり急である。西側、南側の壁は把握できなかった。

〈床〉 ほぼ平坦である。

〈炉〉 床面南側に、径約45cmの石囲炉が見られた。

〈柱穴〉 検出されなかった。

〈施設〉 なし。

〈遺物〉 第15図3は、深鉢形土器の口縁部～胴部上半で、全面にR L繩文を縦位に施し、2本の縦方向への沈線を有する。繩文時代後期のものと思われる。第15図4・5は、深鉢形土器の口縁部で、共にR L繩文を縦位に施す。第15図6は、小型の深鉢形土器である。胴部全面にR L繩文を縦位に施し、繩文時代後期のものと思われる。いずれも覆土からの出土である。

〈小結〉 出土遺物より、本住居跡は、繩文時代後期以前のものと思われる。

### 第3号住居跡（第6図）

〈位置〉 E・F-7・8グリッドに位置する。

〈確認〉 黒色土及び暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〈重複〉 第2号溝状ピットと重複。本住居が新しい。

〈規模〉 東西2.33m×南北2.35m、深さ34cm。

〈平面形〉 円形である。

〈覆土〉 4層に分層された。人為堆積と思われる。

〈壁〉 垂直に近い立ち上がりである。

〈床〉 ほぼ平坦である。

〈炉〉 床面中央に深鉢形土器の上半部が埋設されており、土器埋設炉である。掘り方は開口部で径32cmの大きさである。使用した土器は口縁部で径22cmで、胴部にR L繩文を横位に施している。

〈柱穴〉 本住居跡からは5つのピットが確認された。うちPit1～Pit4は柱穴となる可能性がある。

Pit1-深さ24cm、Pit2-深さ27cm、Pit3-深さ26cm、Pit4-深さ42cm、Pit5-深さ2cm。

〈施設〉 壁溝が断続的に巡っている。

〈遺物〉 炉の埋設土器第15図7のみである。粗製の深鉢形土器で、上半分が存在している。胴部全面に単節の斜繩文を施しておらず、繩文時代中期末頃のものと思われる。

〈小結〉 炉の土器から、繩文時代中期末～後期初頭の住居跡と思われる。

## 2 土坑

### 第1号土坑（第7図）

B・C-25グリッドに位置する。黒色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はやや不整な隅丸方形で、開口部の径は東西136cm×南北120cm、底面の径は東西108cm×南北108cm、深さ10cmである。壁は底面から外傾して立ち上がっており、底面はほぼ平坦であるが、底面西端

に径約40cm、深さ11cmの小ピットがある。覆土は4層に分層され、人為堆積と思われる。覆土より、縄文時代晚期の土器が出土している。本土坑は、縄文時代晚期のものと思われる。

#### 第2号土坑（第7図）

C-33グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はやや不整な円形で、開口部の径は東西90cm×南北94cm、底面の径は東西80cm×南北68cm、深さ44cmである。壁は底面から急に立ち上がり、開口部付近で外傾している。底面はやや凹凸がある。覆土は4層に分層され、人為堆積と思われる。覆土より、平安時代のものと思われる土器片が出土している（外面調整、内面調整共にヘラナデ）。本土坑は、平安時代のものと思われる。

#### 第3号土坑（第7図）

B・C-29グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は、北側が調査区外にかかっているため、正確には把握できないが、ほぼ円形になるものと思われる。開口部の径は東西185cm、底面の径は東西164cm、深さ15cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。覆土は1層であり、自然堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第4号土坑（第8図）

C-33グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。第5号土坑に隣接しているが、重複ではない。平面形はやや不整な円形で、開口部の径は東西120cm×南北110cm、底面の径は東西106cm×南北98cm、深さ96cmである。壁は底面からほぼ垂直に近く立ち上がり、開口部付近で広がる。底面は平坦である。覆土は10層に分層され、人為堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第5号土坑（第8図）

B・C-23・24グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。第4号土坑と隣接しているが、重複ではない。平面形はやや不整な隅丸方形で、開口部の径は長径106cm×短径88cm、底面の径は長径84cm×短径72cm、深さ104cmである。壁は底面からほぼ垂直に近く立ち上がり、開口部付近で広がる。底面はほぼ平坦である。覆土は5層に分層され、自然堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第6号土坑（第8図）

D・E-24グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は、底面は隅丸方形であるが、開口部はやや不整な円形である。開口部の径は東西142cm×南北142cm、底面の径は東西80cm×南北68cm、深さ96cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中ほどから外に広がり、開口部できらに大きく外へ開く。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分層される。出土遺物はない。本土坑は時期不明の土坑である。

#### 第7号土坑（第9図）

D・E-33・34グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は、底面はほぼ円形で、開口部は東西に近い不整な楕円形である。開口部の径は東西122cm×南北100cm、底面の径は東西86cm×南北82cm、深さ18cmである。壁は底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部で広がるが、東方向へは、立ち上がりが緩やかになる。底面は平坦である。覆土は1層で、自然堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は時期不明の土坑である。

#### 第8号土坑（第9図）

D・E-33グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はかなり不整な隅丸方形で、開口部の径は東西108cm×南北120cm、底面の径は東西92cm×南北104cm、深さ14cmである。壁は底面からやや急に立ち上がり、開口部で広がる。底面は平坦である。覆土は2層に分層される。出土遺物はない。本土坑は時期不明の土坑である。

#### 第9号土坑（第9図）

C-28グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は南北に長い楕円形で、開口部の径は東西94cm×南北102cm、底面の径は東西88cm×南北96cm、深さ16cmである。壁は底面からかなり急に立ち上がるが、一部中ほどで内傾している部分もある。底面は平坦である。覆土は1層で、自然堆積と思われる。遺物は覆土より、縄文時代中期末～後期初頭の土器が出土している。本土坑は、縄文時代後期以前の土坑と思われる。

#### 第10号土坑（第9図）

C-29グリッドに位置する。黒色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はほぼ円形である。開口部の径は南北197cm、底面の径は南北200cm、深さ33cmである。壁は北側では底面からやや内傾して急に立ち上がり、東・南側では底面からやや外傾して急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層される。覆土より、縄文時代晩期のものと思われる土器片が出土している。本土坑は、縄文時代晩期の土坑であると思われる。

#### 第11号土坑（第9図）

D-31・32グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はほぼ円形で、開口部の径は東西136cm×南北150cm、底面の径は東西126cm×南北135cmで、深さ38cmである。壁は底面からかなり急に立ち上がる。底面はやや凹凸がある。覆土は1層で、自然堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第12号土坑（第9図）

D・E-32グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。第13号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は円形で、開口部の径は東西114cm×南北110cm、底面の径は東西102cm×南北103cm、深さ32cmである。壁は底面から開口部に向かって、急な立ち上がりである。底面はほぼ平

坦である。覆土は1層である。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第13号土坑（第9図）

D・E-32グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。第12号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は不整な円形と思われる。開口部の径は南北155cm、底面の径は南北139cm、深さ25cmである。壁は底面から急な立ち上がりで、開口部へ向けて広がる。底面は平坦である。覆土は1層である。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第14号土坑（第10図）

D・E-31グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はやや不整な円形で、開口部の径は東西135cm×南北142cm、底面の径は東西127cm×南北130cm、深さ29cmである。壁は垂直に近い立ち上がりで、底面から開口部へ向けて、南西部はやや外傾、北東部はやや内傾している。底面はやや西側に傾いている。覆土は2層に分層される。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第15号土坑（第10図）

E-32・33グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は、南側部分が調査区外にかかっており、正確には把握できないが、ほぼ円形ないしは梢円形になるものと思われる。開口部の径は東西157cm、底面の径は東西107cm、深さ20cmである。壁は底面からやや内傾して急に立ち上がり、中頃から外へ大きく開く。底面はほぼ平坦である。覆土は1層で、自然堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第16号土坑（第10図）

B・C-24グリッドに位置する。黒褐色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はやや不整な、南北に長い梢円形で、開口部の径は東西115cm×南北146cm、底面の径は東西68cm×南北122cm、深さ47cmである。壁は底面からやや急に立ち上がり、開口部で外に広がる。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分層される。覆土より、縄文時代の土器片が出土している。本土坑は、縄文時代の土坑と思われる。

#### 第17号土坑（第10図）

B・C・D-15グリッドに位置する。黒褐色土及び黑色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はやや不整な円形で、開口部の径は東西160cm×南北152cm、底面の径は東西160cm×南北170cm、深さ68cmである。壁はフラスコ状である。底面はほぼ平坦である。覆土は11層に分層され、人為堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は、縄文時代のフラスコ状ピットである。

#### 第18号土坑（第10図）

D-14・15グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は不整な

円形である。開口部の径は東西116cm×南北116cm、底面の径は東西67cm×南北57cm、深さ53cmである。壁はやや急に立ち上がり、開口部で広がる。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分層される。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第19号土坑（第11図）

E-10グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は南北に長い不整な楕円形で、開口部の径は東西138cm×南北230cm、底面の径は東西125cm×南北209cm、深さ20cmである。壁は底面からやや急に立ち上がり、開口部に向けて広がる。底面は南側が少し下がっている。覆土は1層で、自然堆積と思われる。覆土より、縄文時代の土器片が出土している。本土坑は、縄文時代の土坑と思われる。

#### 第20号土坑（第11図）

C-D-9・10グリッドに位置する。黒色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形はやや不整な円形で、開口部の径は東西170cm×南北174cm、底面の径は東西235cm×南北203cm、深さ161cmである。壁はフラスコ状である。底面はほぼ平坦である。覆土は17層に分層され、人為堆積と思われる。覆土より、縄文時代中期末～後期初頭の土器片が出土している。本土坑は、縄文時代中期～後期のフラスコ状ピットと思われる。

#### 第21号土坑（第11図）

D-10グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。第22号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形になるものと思われる。開口部の径は東西137cm、底面の径は東西120cm、深さ16cmである。壁は底面から開口部に向けて緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は1層である。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第22号土坑（第11図）

D-10グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。第21号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は東西に広い楕円形で、開口部の径は東西110cm×南北89cm、底面の径は東西65cm×南北51cm、深さ32cmである。壁は底面から開口部に向けてやや急に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は1層である。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第23号土坑（第12図）

B-13グリッドに位置する。黒色土の落ち込みとして確認した。重複はない。平面形は北側が調査区外にかかっているので正確には把握できないが、ほぼ円形になるものと思われる。開口部の径は東西218cm、底面の径は東西192cm、深さ59cmである。壁は、南側は底面から急に立ち上がり、開口部へ向けて開く。北側は、底面から内傾して急に立ち上がる。底面は中央が幾分低くなっている。覆土は3層に分層され、自然堆積と思われる。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第24号土坑（第12図）

B-10・11グリッドに位置する。黒色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認した。第25号土坑と重複しており、本土坑が古い。平面形は北西部分が調査区外にかかっているので正確には把握できないが、やや不整な円形になるものと思われる。開口部の径は232cm、底面の径は116cm、深さ48cmである。壁はやや急に立ち上がり、開口部に向かって広がる。底面は、東側に落ち込みがある。覆土は1層である。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

#### 第25号土坑（第12図）

B-10・11グリッドに位置する。第24号土坑精査中に、黒褐色土の落ち込みとして確認した。第24号土坑と重複しており、本土坑が新しい。平面形は北西部分が調査区外にかかっているので正確には把握できないが、ほぼ円形になるものと思われる。開口部の径は130cm、底面の径は108cm、深さ65cmである。壁は、東側はなだらかに、西側はやや急に立ち上がり、開口部に向かって広がる。底面はいくぶん凹凸がある。覆土は2層に分層される。出土遺物はない。本土坑は、時期不明の土坑である。

### 3 溝状ピット

#### 第1号溝状ピット（第13図）

〈位置〉 E-16グリッドに位置する。

〈確認〉 黒色土の落ち込みとして確認した。

〈重複〉 なし。

〈規模と形状〉 開口部の径は短軸23cm、底面の径は短軸5cm。長軸方向は一部調査区外にかかるため、不明である。深さは110cmである。平面形は長楕円形で、短軸断面上では細長いV字状。長軸断面上では、中央部分が47cmほどで落ち込みが止まり、その両脇はさらに落ち込む。

〈覆土〉 5層に分層された。自然堆積と思われる。

〈遺物〉 なし。

〈小結〉 本溝状ピットは、時期不明の溝状ピットである。

#### 第2号溝状ピット（第13図）

〈位置〉 E・F-7・8グリッドに位置する。

〈確認〉 第3号住居跡を精査中に黒色土の落ち込みとして確認した。

〈重複〉 第3号住居跡と重複。本溝状ピットが古い。

〈規模と形状〉 開口部の径は短軸44cm、長軸300cm、底面の径は短軸15cm、長軸258cm、深さ116cmである。平面形は長楕円形で、短軸断面上ではU字状、長軸断面上では台形状に、開口部へ向けて外側へ開くような形状である。

〈覆土〉 4層に分層された。

〈遺物〉 なし。

〈小結〉 第3号住居跡が縄文時代中期末～後期初頭の住居跡であり、本溝状ピットはそれ以前のも

のである。

#### 4 屋外炉

##### 第1号屋外炉（第14図）

〈位置〉 C-30グリッドに位置する。

〈重複〉 なし。

〈規模と形状〉 長軸80cm、短軸52cmの石囲炉である。北東方向は石が二重になっている。ほぼ中央に土器が埋設されており、その土器の下方に、別の土器が埋設されている。

〈覆土〉 4層に分層された。明確な燃焼面は確認されなかった。

〈遺物〉 覆土より、縄文時代の土器片が出土した。

〈小結〉 本屋外炉は、縄文時代晩期のものと思われる。

##### 第2号屋外炉（第14図）

〈位置〉 D・E-34・35グリッドに位置する。

〈重複〉 なし。

〈規模と形状〉 東西90cm×南北97cmの範囲で礫が配置されている。中に径13cmほどの焼土が確認された。また、礫を除去したところ、その下から新たな焼土（長軸53cm、短軸37cm）が確認された。

〈遺物〉 なし。

〈小結〉 本屋外炉は、時期不明の屋外炉である。

#### 5 埋設土器遺構

##### 第1号埋設土器遺構（第14図）

〈位置〉 C-24グリッドに位置する。

〈重複〉 なし。

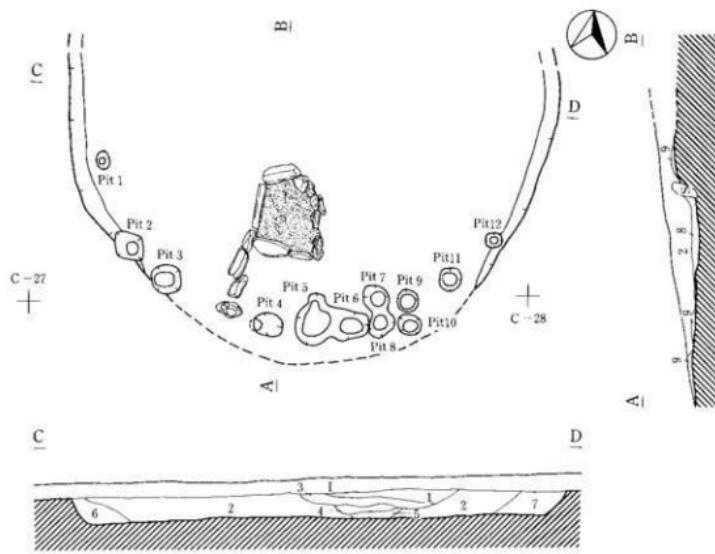
〈規模と形状〉 掘り方の上端で南北35cm、下端で南北17cmを計る。断面形は船底形。壁高は13cmである。

〈覆土〉 3層に分層された（土器内覆土は2層）。

〈遺物〉 第17図4は、縄文時代の晩期の粗製の鉢形土器で、大洞A式期に相当すると思われる。口縁部に3本の平行沈線があり、胴部にはL R縄文を横位に施文する。

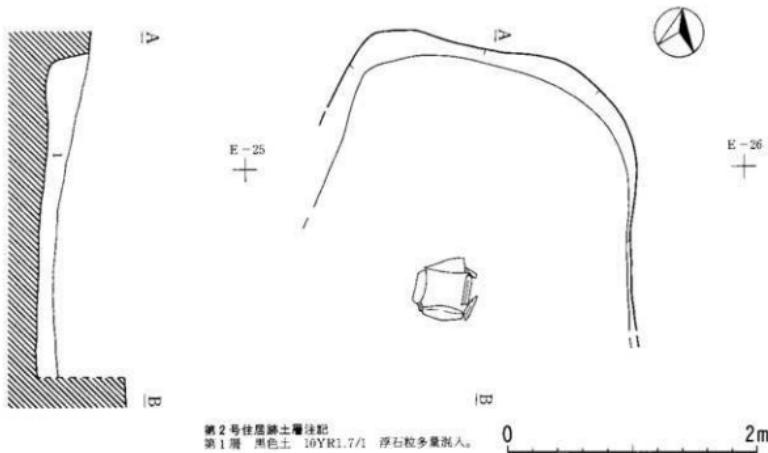
〈小結〉 本埋設土器遺構は、埋設土器から縄文時代晩期のものである。

（水谷 和憲）



第1号住居跡土層注記	
第1層	黑色土 10YR2/1
第2層	黑色土 7.5YR2/1
第3層	暗褐色土 10YR3/4
第4層	明褐色土 7.5YR3/8
第5層	黑色土 7.5YR1.7/1
第6層	暗褐色土 7.5YR3/3
第7層	暗褐色土 10YR2/2
第8層	黑褐色土 10YR2/2
第9層	暗褐色土 10YR3/4

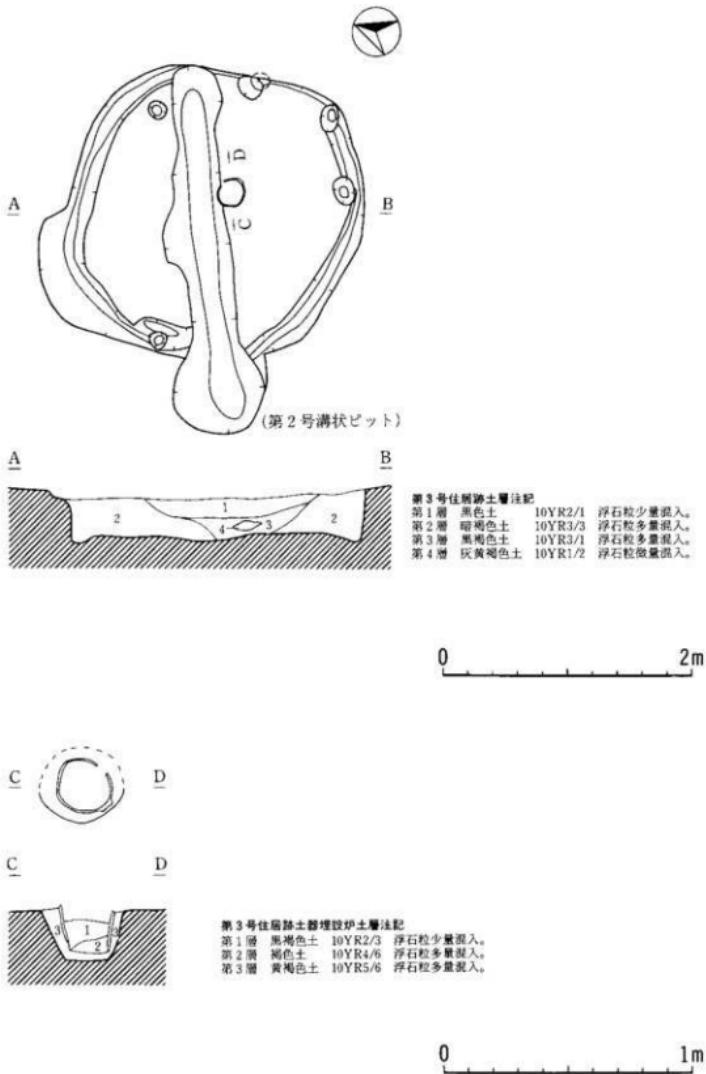
浮石粒多量混入。  
浮石粒中量混入。  
浮石粒中量混入。  
浮石粒多量混入。  
浮石粒少量混入。  
浮石粒少量混入。  
浮石粒多量混入。  
浮石粒少量混入。



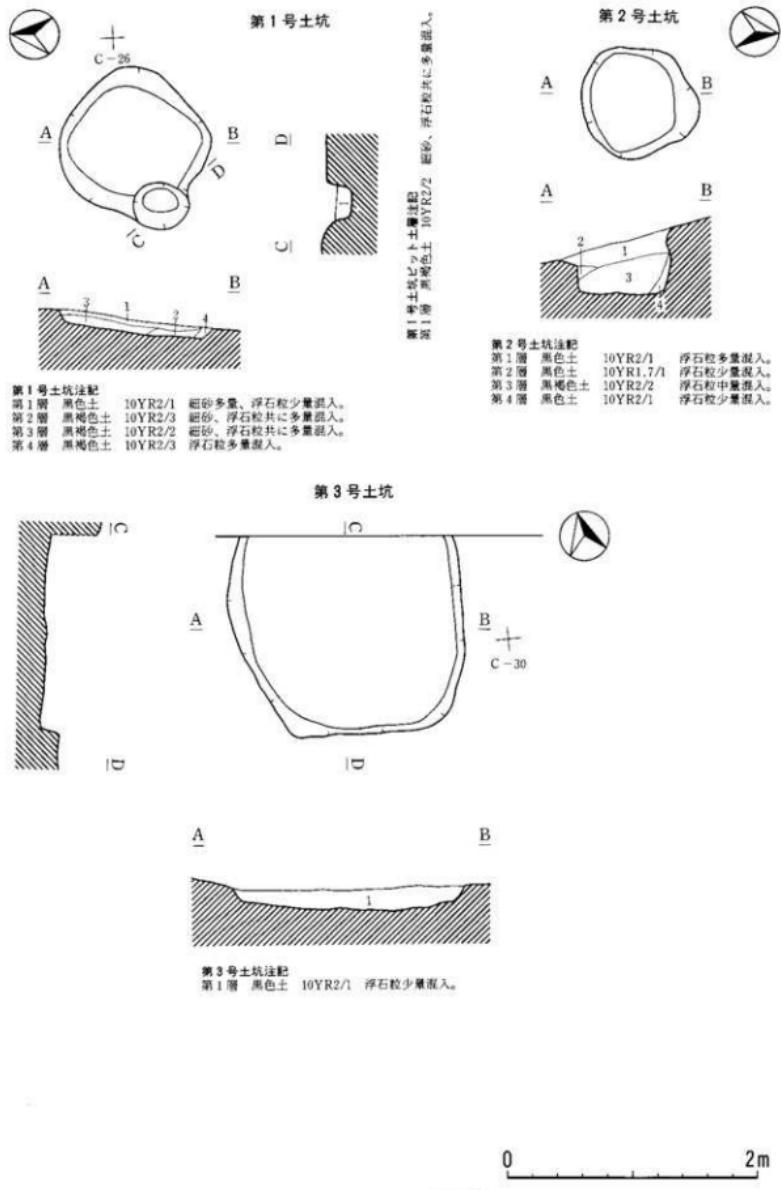
第2号住居跡土層注記	
第1層	黑色土 10YR1.7/1

浮石粒多量混入。

第5図 第1・2号住居跡

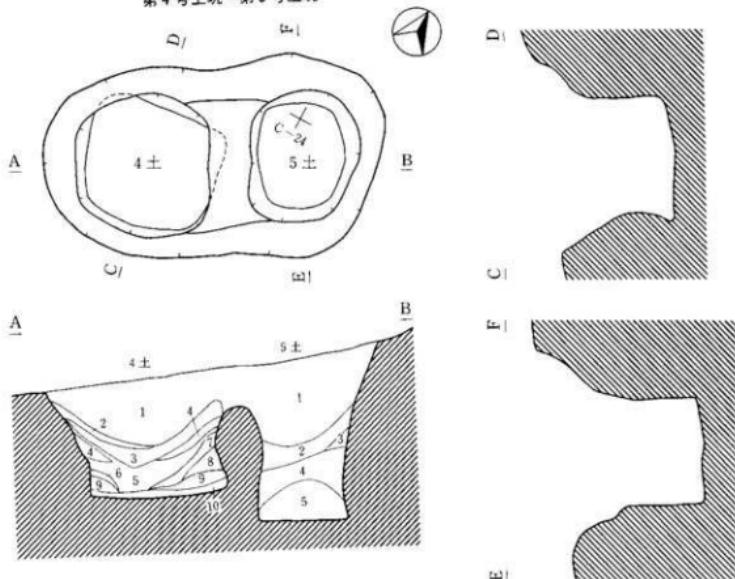


第6図 第3号住居跡



第7図 第1・2・3号土坑

第4号土坑・第5号土坑



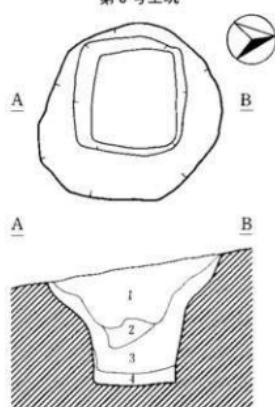
第4号土坑注記

第1層	黑色土	10YR1.7/1	浮石粒多量混入。
第2層	黑色土	10YR1.7/1	浮石粒多量混入。
第3層	黑色土	10YR1.7/1	浮石粒多量混入。
第4層	南端浮石層。		
第5層	黑色土	10YR1.7/1	浮石粒多量混入。
第6層	黑褐色土	10YR2/2	浮石粒微量混入。
第7層	浮石層。		黑褐色土少量混入。
第8層	黑褐色土	10YR3/3	浮石粒少量混入。
第9層	浮石粒層。		
第10層	黑褐色土	10YR2/2	浮石粒多量混入。

第5号土坑注記

第1層	黑色土	10YR1.7/1	浮石粒多量混入。
第2層	黑色土	10YR2/1	浮石粒中量混入。
第3層	黑褐色土	10YR2/2	の混合土。浮石粒多量混入。
第4層	黑色土	10YR3/4	
第5層	浮石粒層。	10YR2/1	浮石粒多量混入。

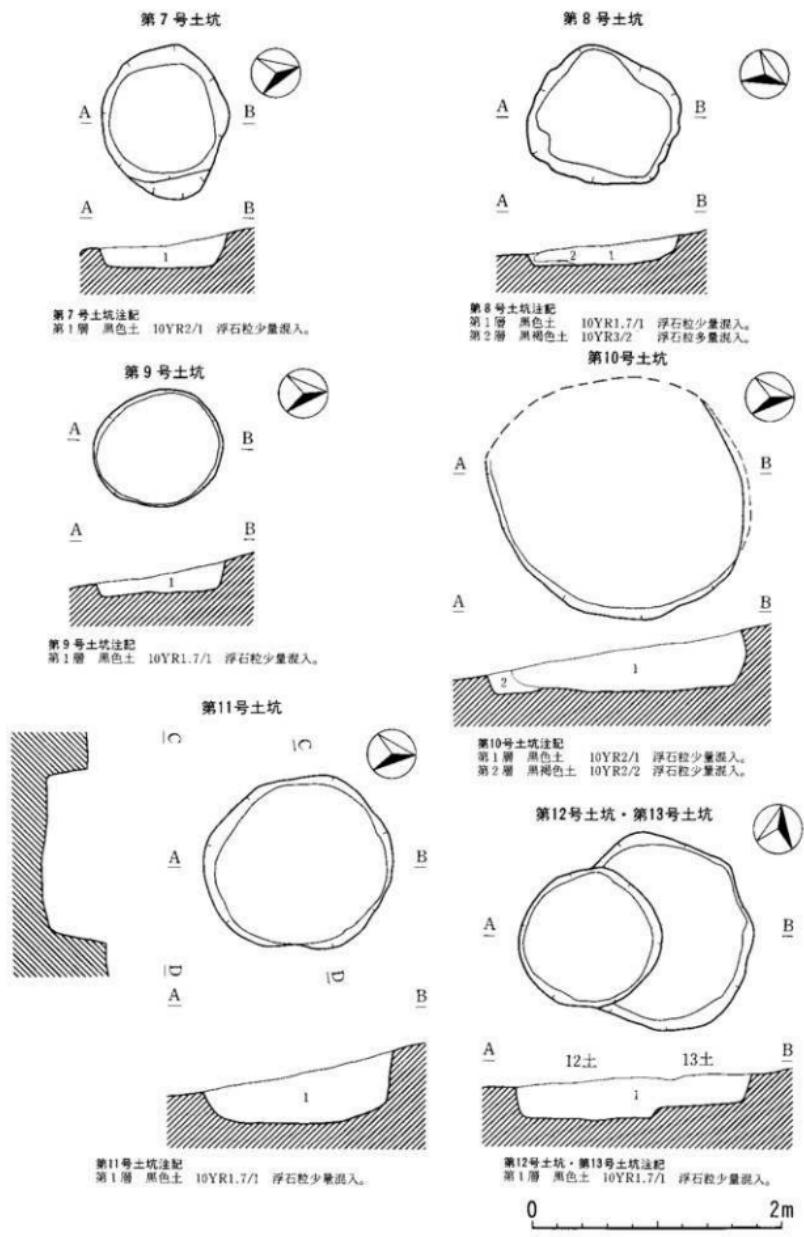
第6号土坑



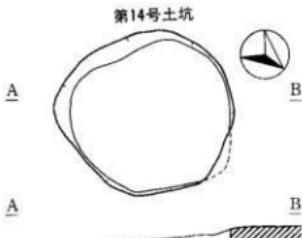
第6号土坑注記

第1層	黑色土	10YR2/1	浮石粒微量混入。
第2層	黑色土	10YR1.7/1	浮石粒少量混入。
第3層	黑褐色土	10YR3/1	浮石粒多量混入。
第4層			浮石粒層。

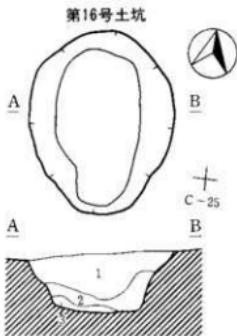
第8図 第4・5・6号土坑



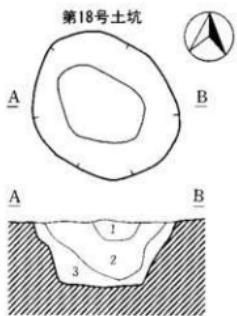
第9図 第7・8・9・10・11・12・13号土坑



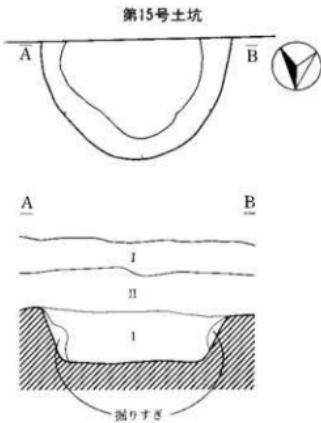
第14号土坑注記  
第1層 黒褐色土 10YR2/1 浮石粒少量混入。  
第2層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒少量混入。



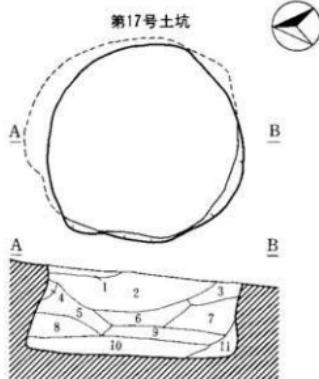
第16号土坑注記  
第1層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒中量混入。  
第2層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒多量混入。  
第3層 黑色土 10YR2/1 浮石粒少量混入。



第18号土坑注記  
第1層 黑色土 10YR2/1 浮石粒少量混入。  
第2層 黑色土 10YR1.7/1 浮石粒多量の混入。  
第3層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒多量混入。



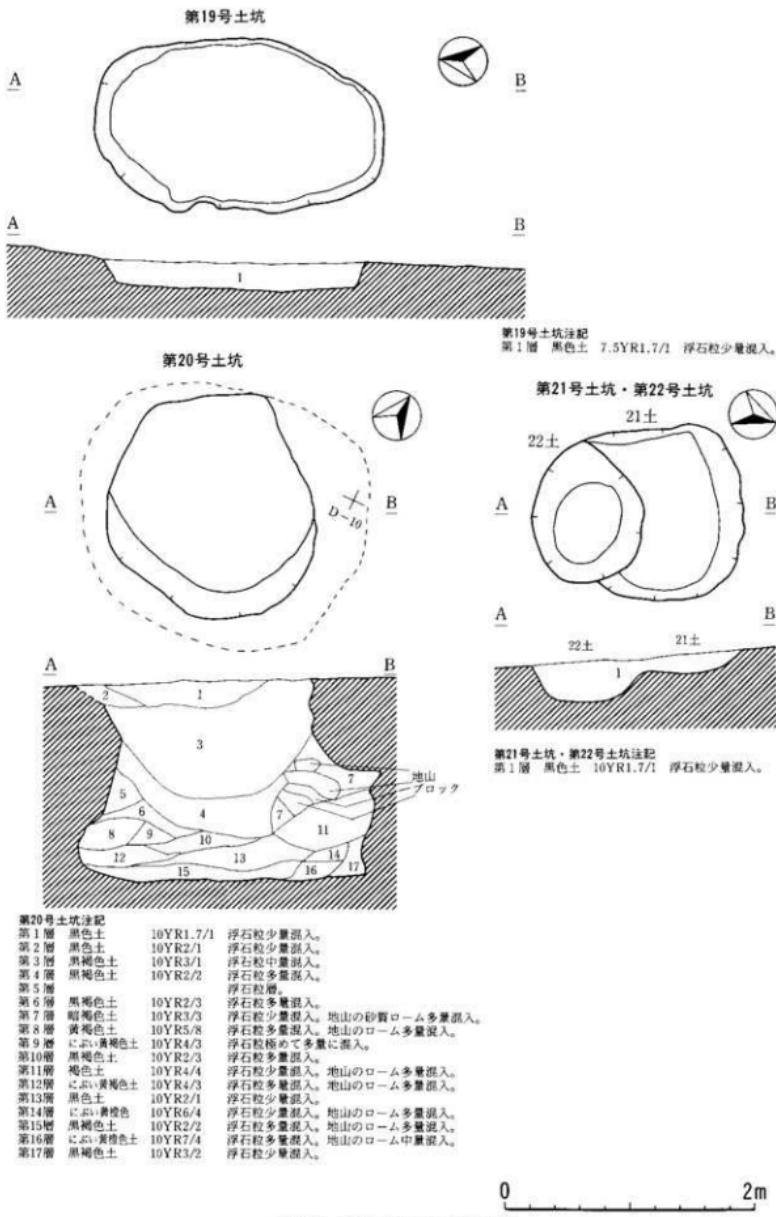
第15号土坑注記  
第1層 黑色土 7.5YR1.7/1 浮石粒少量混入。



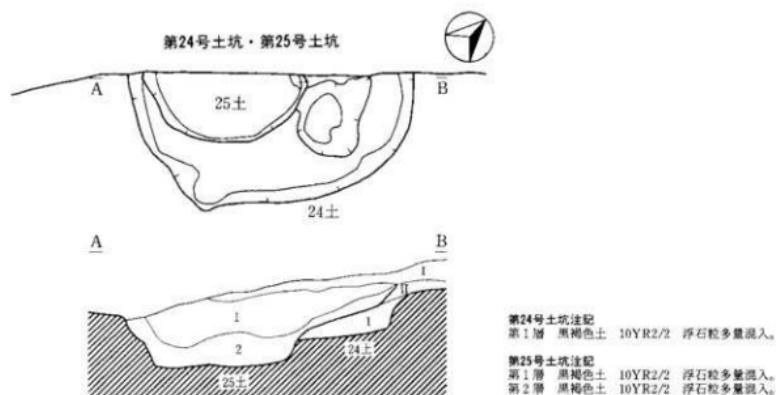
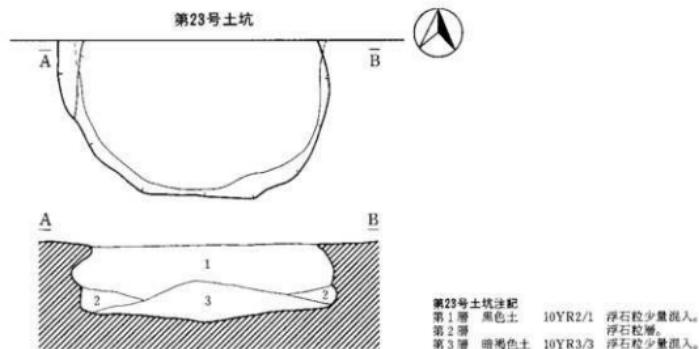
第17号土坑注記  
第1層 黑褐色土 10YR2/2  
第2層 黑色土 10YR1.7/1 浮石粒多量混入。  
第3層 黑色土 10YR1.7/1 浮石粒少量混入。  
第4層 黑色土 10YR2/1 浮石粒少量混入。  
第5層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒多量混入。  
第6層 黑色土 10YR2/1 浮石粒多量混入。  
第7層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒少量混入。  
第8層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒多量混入。  
第9層 黑色土 10YR2/1 浮石粒微量混入。  
第10層 黑色土 10YR2/1 浮石粒少量混入。  
第11層 黑色土 10YR2/1 浮石粒少量混入。

0                                  2m

第10図 第14・15・16・17・18号土坑

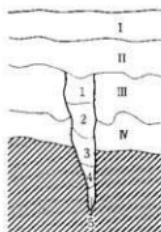
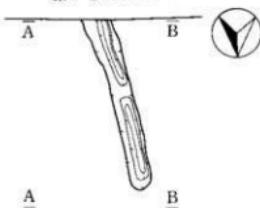


第11図 第19・20・21・22号十指



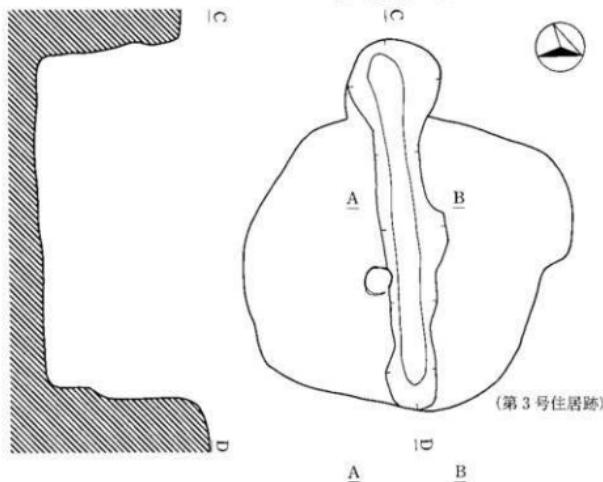
第12図 第23・24・25号土坑

第1号溝状ピット

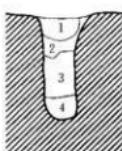


第1号溝状ピット 土層注記  
 第1層 黒色土 10YR1,7/1 浮石粒微量混入。  
 第2層 黒色土 7.5YR1,7/1 浮石粒少量混入。  
 第3層 黒色土 10YR1,7/1 浮石粒微量混入。  
 第4層 黒色土 10YR2/1 浮石粒微量混入。  
 第5層 黒色土 7.5YR1,7/1 浮石粒かたまりで混入。

第2号溝状ピット

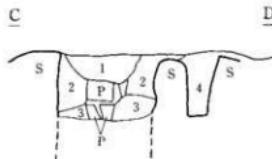
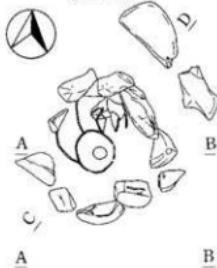


第2号溝状ピット注記  
 第1層 黒色土 10YR2/1 浮石粒多量混入。  
 第2層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒多量混入。  
 第3層 明褐色土 10YR3/3 浮石粒多量混入。  
 第4層 黄褐色土 10YR5/4 浮石粒少量混入。

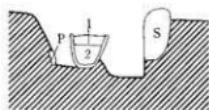


第13図 第1号溝状ピット・第2号溝状ピット

### 第1号屋外炉

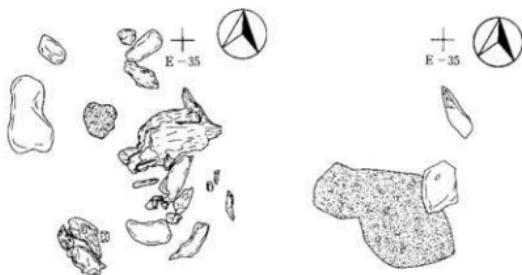


第1号屋外炉土層注記  
第1層 黒褐色土 10YR2/1  
第2層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒微量含む。  
第3層 黑褐色土 10YR3/2  
第4層 黑褐色土 10YR2/2 浮石粒微量含む。

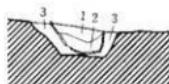
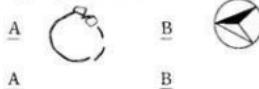


第1号屋外炉 P - 2 内土層注記  
第1層 黑褐色土 10YR2/2 塗化物、浮石粒微量含む。  
第2層 黑色土 10YR1.7/1 浮石粒少量混入。

### 第2号屋外炉



### 第1号埋設土器遺構



第1号埋設土器遺構土層注記  
第1層 黑色土 10YR1.7/1 | の混合土。浮石粒少量混入。  
第2層 黑褐色土 10YR2/3 浮石粒少量混入。  
第3層 黑色土 10YR2/1 浮石粒少量混入。



第14図 第1号屋外炉・第2号屋外炉・第1号埋設土器遺構



1 H. フク土



1 H. フク土



2 H. フク土



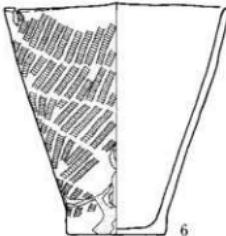
2 H. フク土



2 H. フク土



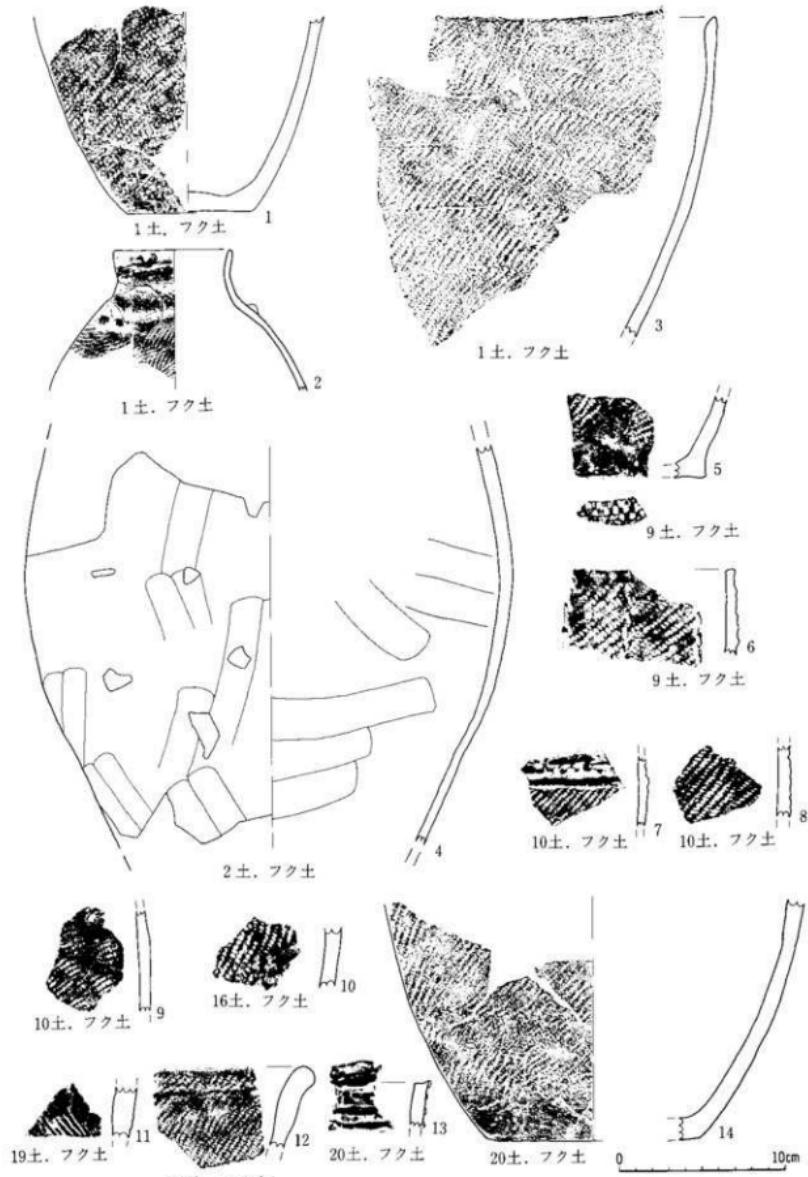
3 H. フク土



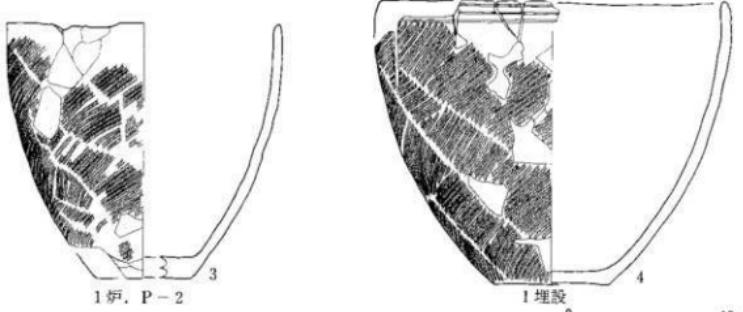
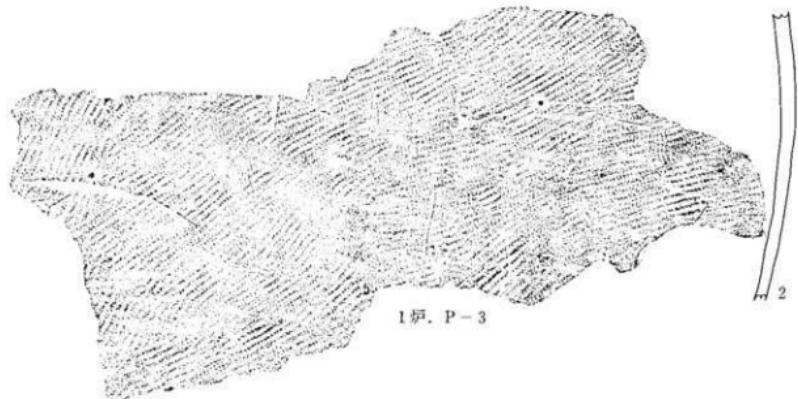
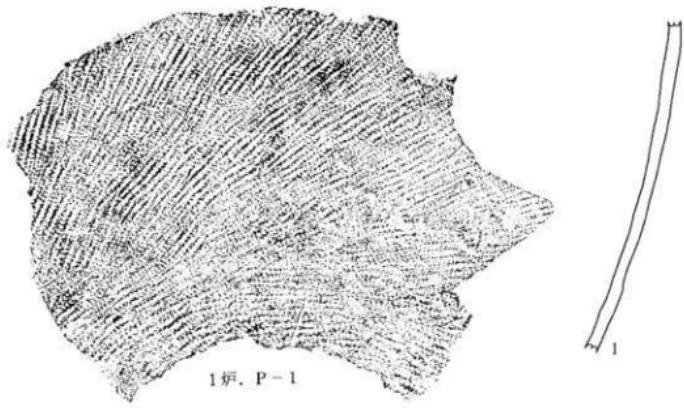
2 H. フク土

0 10cm

第15図 住居跡内出土土器



第16図 土坑内出土土器



第17図 屋外炉・埋設土器遺構出土土器

## 第2節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文時代前期から晩期までの土器、石器及び石棒、土師器が出土した。以下にその概要を述べる。

### 1 土器 (第18図～第20図)

本遺跡出土の土器は、段ボール箱で5箱ほどである。遺跡内は畠地となっており、それにともなつて削平を受けているため、住居跡や土坑の検出数と比較しても、その数は非常に少ない。時期的には、出土量が少ないとかかわらず、縄文時代前期～晩期のもの、平安時代の土師器と多岐にわたって出土している。ただし、縄文地文のみの土器破片が多く、時期を特定できるものは少ない。以下、出土した土器を時期別に記載する。

#### 第I群土器 縄文時代前期に相当する土器 (第18図1)

2片のみの出土である。いずれも胸部の破片であり、同一個体と思われる。木目状燃糸文が施されている。円筒下層d式に相当する土器である。

#### 第II群土器 縄文時代中期に相当する土器 (第18図2～3)

中期と特定できるものは2片だけである。2は深鉢の口縁部で、RL縄文が横位に施文され、粘土紐の貼り付けが施されており、円筒上層d～e式に相当すると思われる。3は深鉢の底部で、RL縄文が縦位に施文されている。

#### 第III群土器 縄文時代晩期に相当する土器 (第18図4～第19図30)

第IV群に次いで多く出土した。しかしこれらは小破片での出土であり、僅かに4～7が全体の器形がおおよそつかめるものである。器種は、鉢形、浅鉢形、深鉢形、皿形、注口等が確認された。

4～22は精製土器である。6・7は胎土及び焼成が非常に良く、丁寧に研磨されている。その反面5・14は胎土及び焼成はあまり良くなく、半精製土器に分類される可能性もある。文様構成は、6～11・17～22は平行沈線を主体としたもので、粘土紐による弧状の隆線装飾を有するもの(7)、二又状突起を有するもの(8・9・20)や、羊歯状文を有するもの(9)、刻み目を有するもの(8・10・17・20・21)が見られる。また、雲形文を主体としたもの(4・5・12・13・15・16)も、多くは平行沈線を伴っている。4・13・16は刻み目を有する。4・5は大洞C<sub>1</sub>式又はC<sub>2</sub>式に相当すると思われる。

23～30は粗製土器である。口縁部に突起を有するもの(16・20)、二又状突起を有するもの(15・19・29)、口唇部に刻み目を有するもの(18)、補修孔を有するもの(17)、口縁部が小波状のもの(30)等が確認された。

#### 第IV群土器 縄文地文・無文の土器 (第19図31～第20図48)

ほとんどが小破片であり、第I群～第III群のいずれにも分類できないものを本群に一括した。数量的には最も多いが、全体的に胎土及び焼成はあまり良くない。器種は深鉢形、鉢形と思われるものが

ほとんどである。口縁部は内湾ぎみのもの（34・37・39・42～46・48）が最も多いが、外反ぎみのもの（35・36）や、ほぼ直線的なもの（41）もいくつかみられる。縄文はL R 縄文を横位に施文したものが最も多いが、縦位に施文したものや、R L 縄文、L 縄文も見られる。35・36には、結節回転文がみられる。

#### 第V群土器 古代の土師器（第20図49）

平安時代のものと思われる土師器が数点出土した。いずれも小破片のため器形等は不明であるが、甕形と思われる破片が多い。いずれも胎土には小礫が相当混入されている。

#### その他

網代痕を有する底部が1点出土した（第20図50）。縄文時代中期～後期のものと思われる。

#### 2 石器（第21図～第22図）

石器はすべて遺構外からの出土である。石鎌2点、横型の石匙1点、磨製石斧1点、敲磨器類6点の計10点である。

石鎌が2点出土した（第21図1・2）。1は基部がT字状になっている平基有茎鎌である。基部の先端が欠損している。石質は玉髓である。2は平基無茎鎌である。尖頭部が欠損している。石質は凝灰岩である。

石匙は横型石匙である（第21図3）。横長剝片を素材としており、縁辺部は表裏両面から丁寧に調整されている。石質は珪質頁岩である。

磨製石斧（第21図4）は、欠損して基部だけが残ったものである。石質は緑色細粒凝灰岩である。敲磨器類（第21図5～第22図11）が6点出土した。そのうち凹石として分類したものは2点である。5は表裏両面に凹みを有する。6は磨り痕を併せ持つており、節理による割れた面を有する。磨石として分類したものは3点である。そのうち9は、敲打痕を併せ持っている。敲石として分類したものは1点である。敲磨器類の石質はいずれも砂岩である。

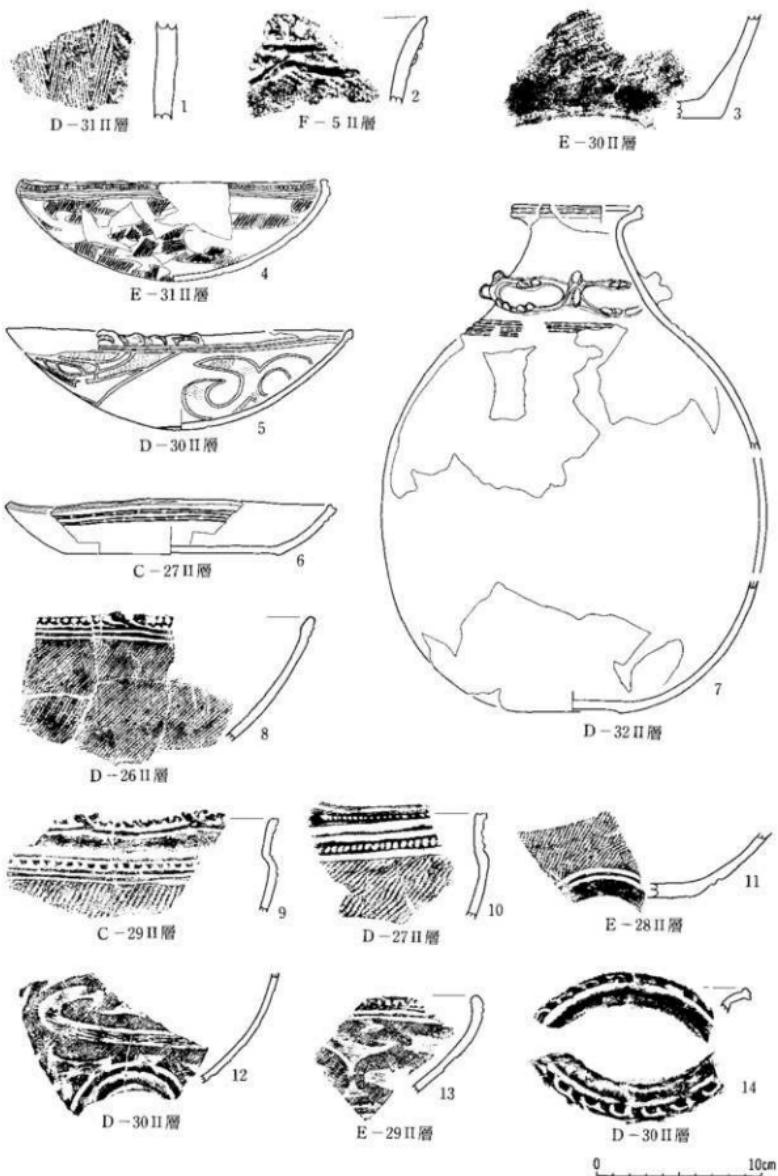
#### 3 石製品

石棒が1点出土している（第22図12）。途中で欠損しているが、ほぼ全体が把握できる。長さ23.7cm、幅3.3cmの細長で、先端は亀頭状である。断面は楕円形であるが、亀頭状の部分は扁平である。石質は頁岩である。

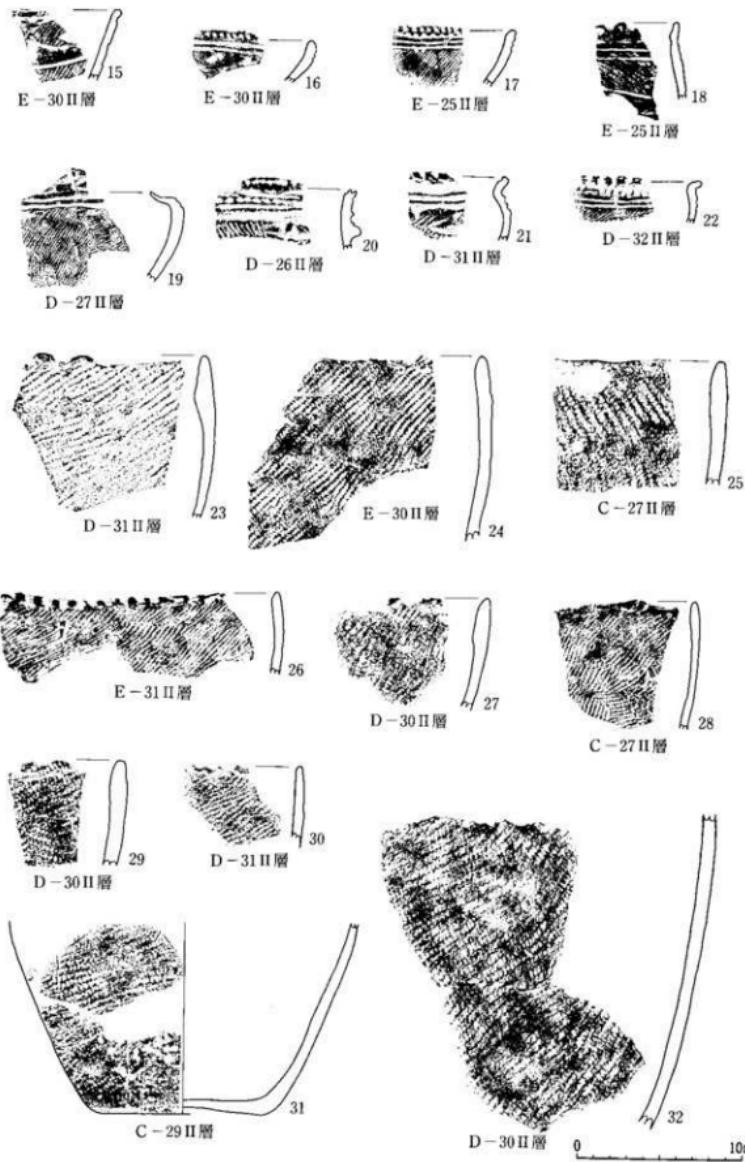
（水谷 和憲）

第2表 石器観察表

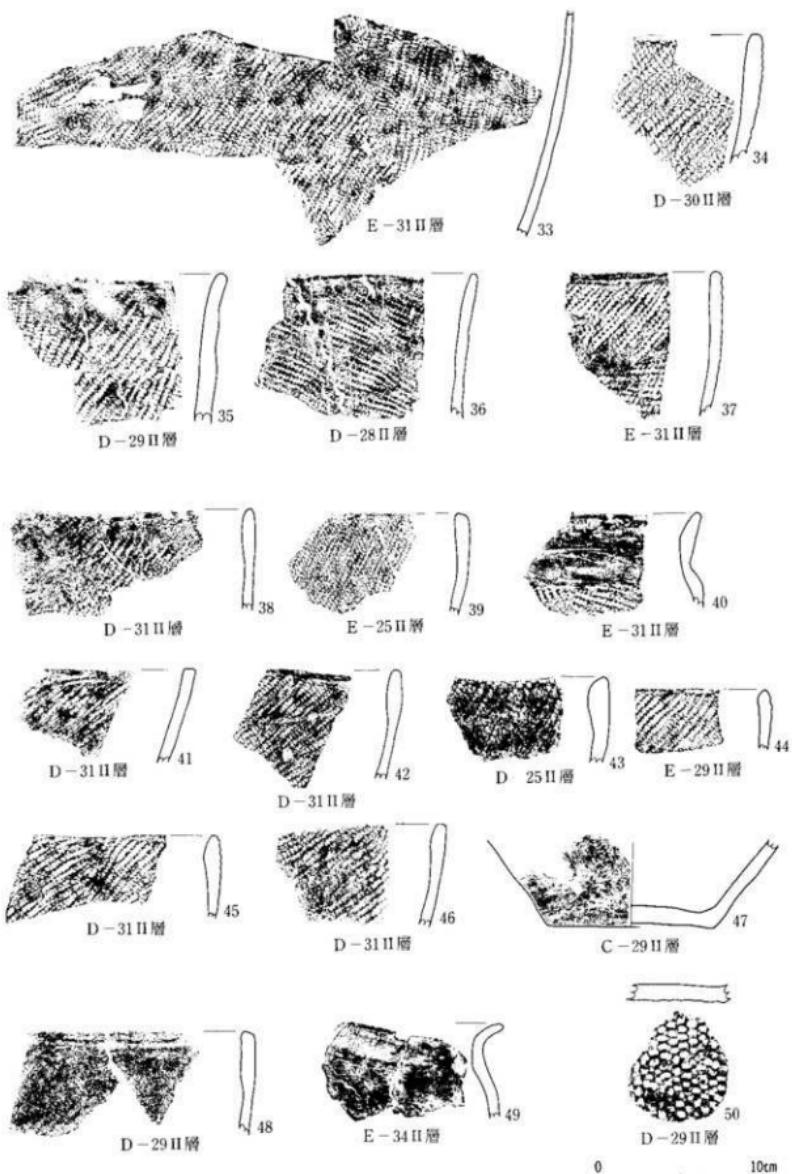
番号	大分類	小分類	層位	大きさ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	石鎚	平基有茎	II	2.0×1.4×0.8	0.8	玉髓	基部欠損
2	石鎚	平基無茎	II	3.9×1.5×0.5	3.2	凝灰岩	尖頭部欠損
3	石匙	横型石匙	II	5.1×7.4×1.1	32.6	珪頁	
4	石斧	磨製石斧	II	4.5×3.3×2.3	45.4	綠細凝	
5	敲磨器	凹石	II	10.6×6.6×5.7	445.7	砂岩	磨痕あり
6	敲磨器	凹石	II	11.6×7.2×4.3	486.3	砂岩	
7	敲磨器	磨石	II	9.6×8.9×5.6	698.5	砂岩	
8	敲磨器	磨石	II	7.9×6.1×4.5	324.8	砂岩	
9	敲磨器	磨石	II	7.3×5.3×4.3	217.9	砂岩	敲打痕あり
10	敲磨器	敲石	II	16.5×6.0×3.9	468.4	砂岩	
(11)	石棒		II	23.7×3.3×1.6	180.7	頁岩	



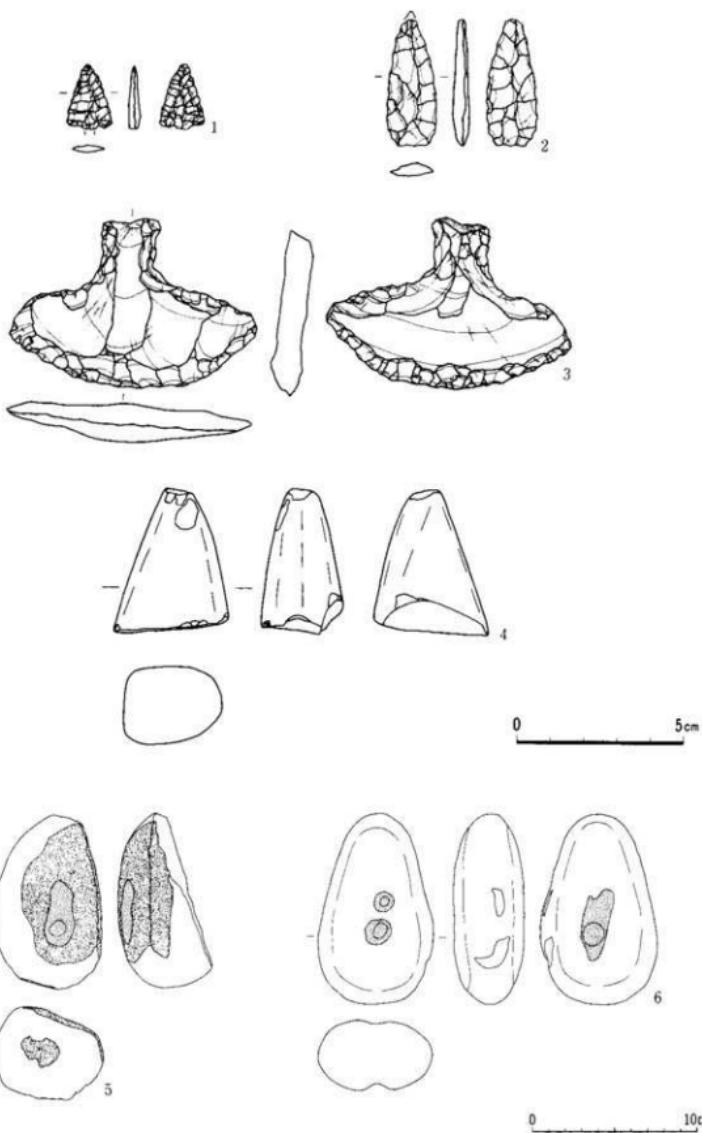
第18図 遺構外出土土器(1)



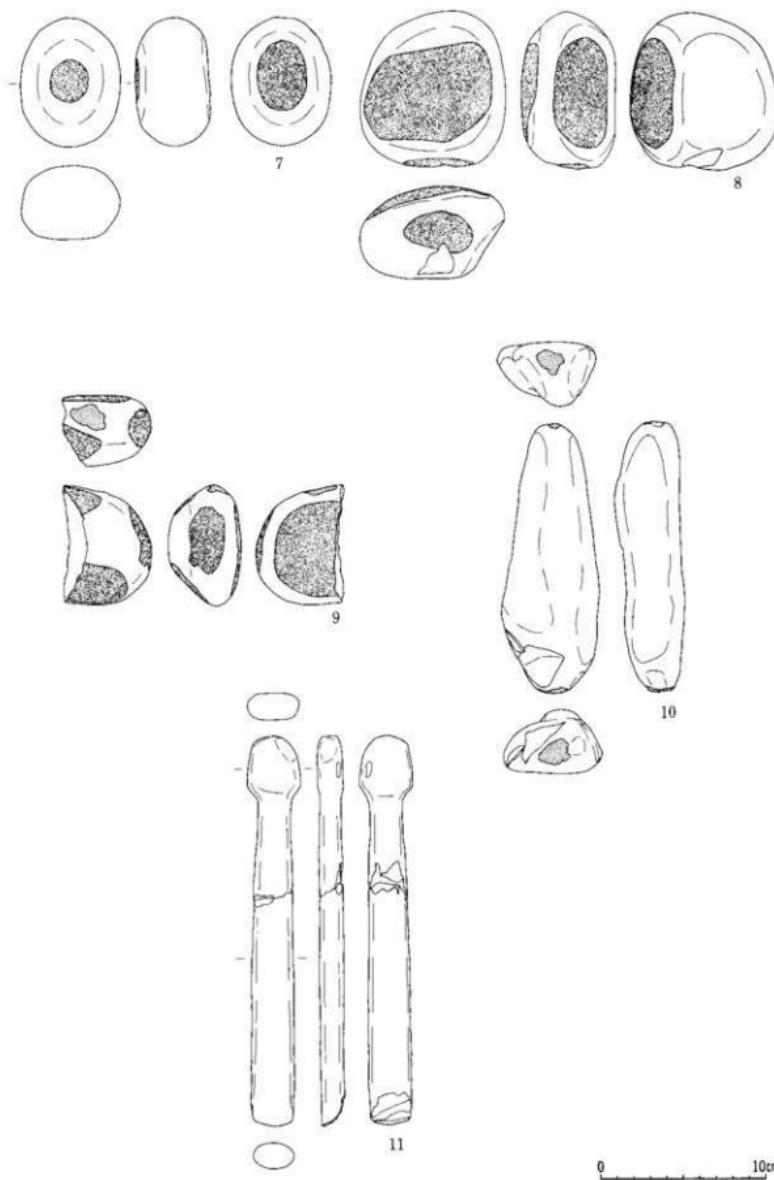
第19図 遺構外出土土器(2)



第20図 遺構外出土土器(3)



第21図 遺構外出土石器



第22図 遺構外出土石器・石製品

## 第V章 まとめ

平成6年に実施した四ツ役遺跡の発掘調査では、次のような成果が得られた。

- 1 本遺跡は、岩手県から南郷村を経て八戸市に流れている新井田川の右岸側の標高180～190mの平頂丘陵の緩やかに南側に傾斜する斜面に立地している。
- 2 検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑25基、溝状ピット2基、屋外炉2基、埋設土器遺構1基である。

竪穴住居跡は、いずれも縄文時代のもので、中期末～晚期のものである。

土坑は、出土遺物がきわめて少なく、時期を明確に判断することのできる土坑は少ないが、縄文時代のものが多いものと思われる。その中にあって第2号土坑は、平安時代の土坑であると思われる。

溝状ピット2基のうち、第2号溝状ピットは、第3号住居跡（縄文時代中期末～後期初頭）より古いものである。

屋外炉2基のうち、第1号屋外炉は縄文時代晩期のものである。

埋設土器遺構は、縄文時代晩期のものである。

- 3 出土土器は、縄文時代前期～晩期の土器、平安時代の土師器である。検出された遺構に比べると少量であった。この点については、遺跡周辺が畠地に造成されたときに削平されたものと思われる。

- 4 石器・石製品は合わせて11点だけであり、いずれも遺構外からの出土である。このことについては、石器も土器同様のことが原因となっている。

- 5 本遺跡の中心的な時期は縄文時代中期から晩期である。しかし、竪穴住居跡は3軒しか検出されず、その他の遺構も密度は比較的薄いことから、集落の中心は調査地域の南側の斜面の下の部分であろうと推測される。

(水谷 和恵)

### 引用・参考文献

青森県教育委員会	1984	「牛ヶ沢(3)遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書 第86集
/	1986	「今津遺跡・間沢遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書 第95集
/	1990	「李沢遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書 第130集
/	1991	「雷遺跡・西山遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書 第136集
/	1993	「野塙(5)遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書 第150集
/	1993	「筋久辺遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書 第151集
八戸市教育委員会	1988	「八幡遺跡」	八戸市埋蔵文化財調査報告書 第26集
村 越 漢	1983	「亀ヶ岡式土器」	
戸沢 充則、他	1994	「縄文時代研究事典」	



作業風景



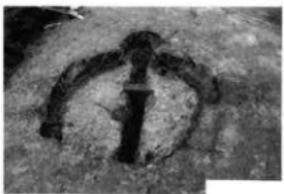
作業風景



第1号住居跡



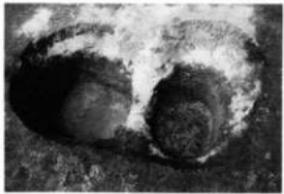
第2号住居跡



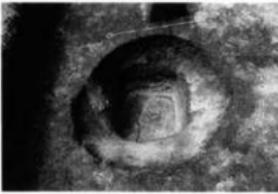
第3号住居跡



第3号土坑

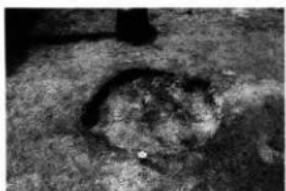


第4号土坑・第5号土坑

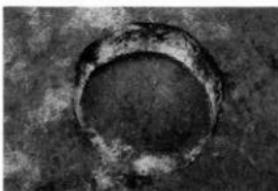


第6号土坑

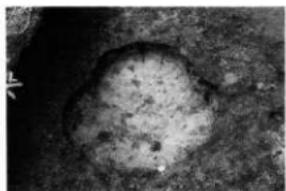
写真(1)



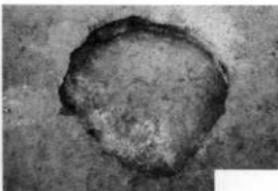
第8号土坑



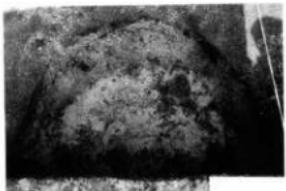
第11号土坑



第12号土坑·第13号土坑



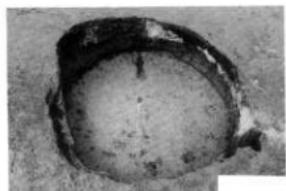
第14号土坑



第15号土坑



第16号土坑

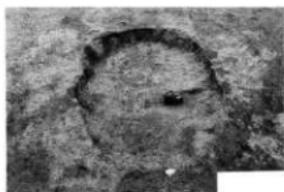


第17号土坑

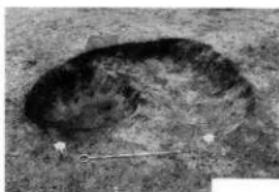


第18号土坑

写真(2)



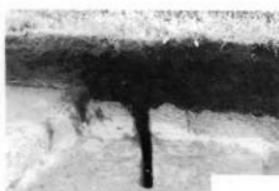
第19号土坑



第21号土坑・第22号土坑



第23号土坑



第1号溝状ピット



第2号溝状ピット



遺物出土状態

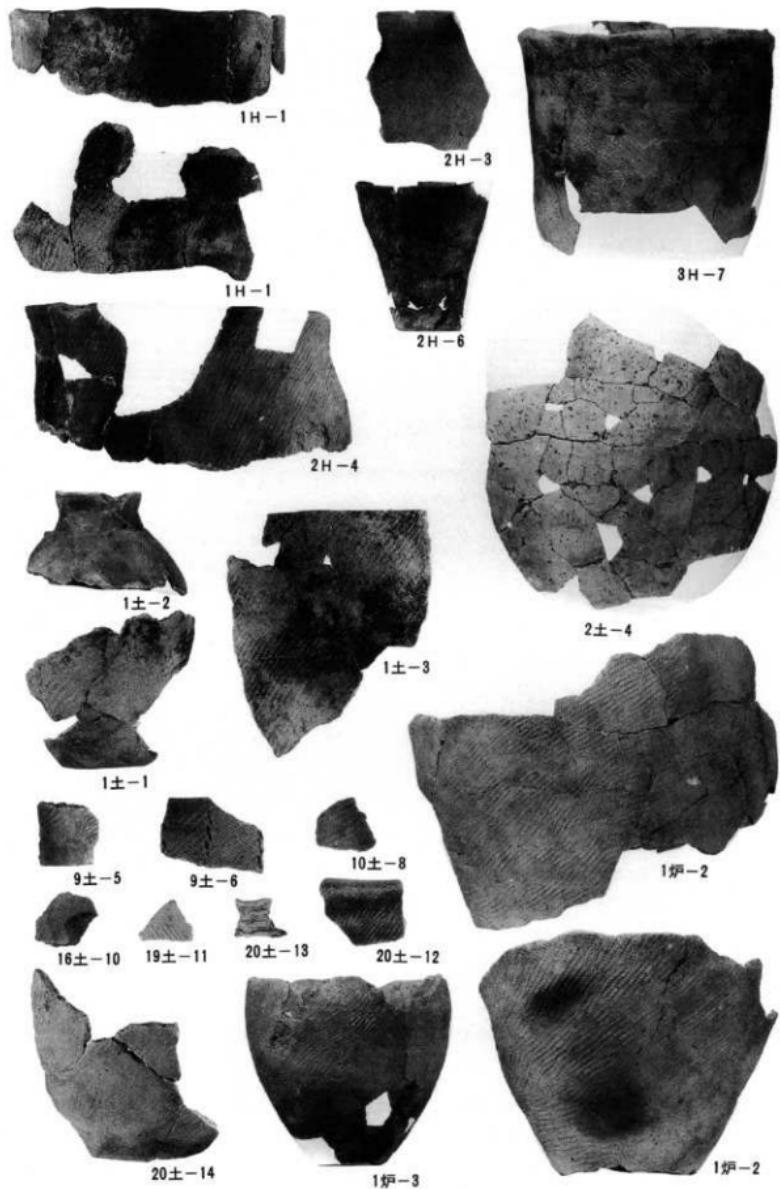


第1号埋設土器遺構

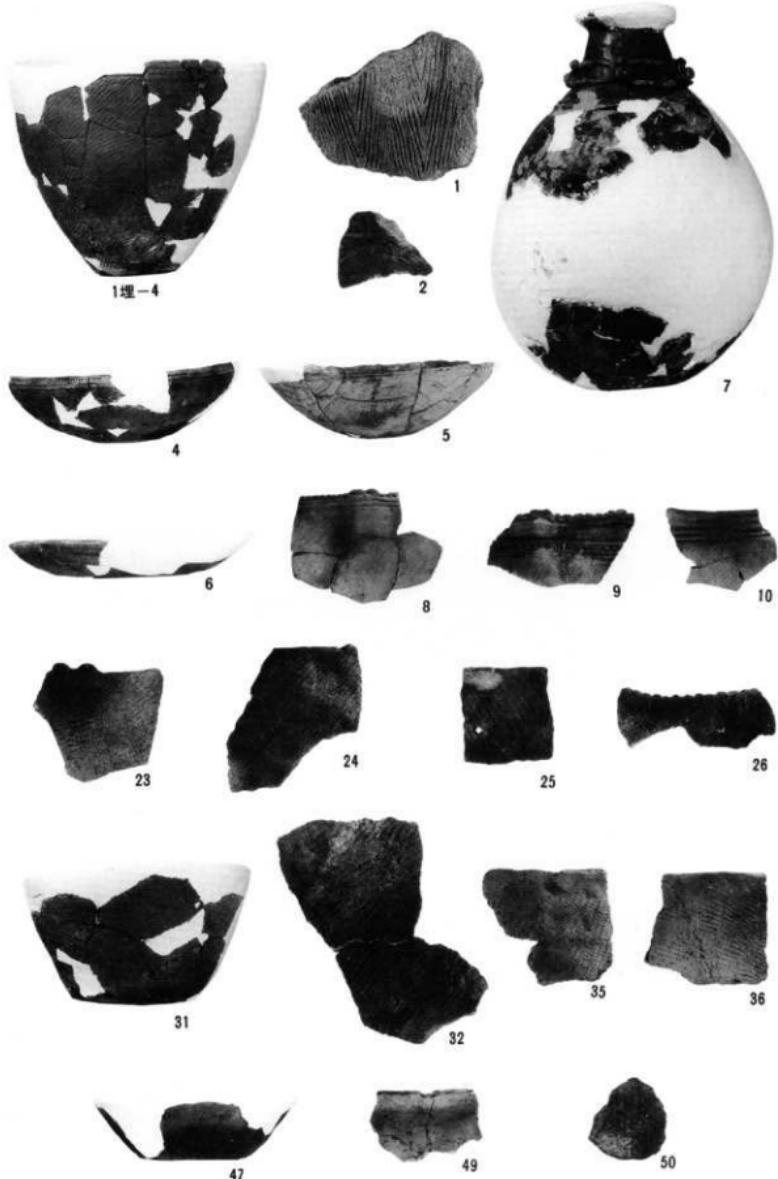


第1号屋外炉

写真(3)



写真(4) 土器



写真(5) 土器



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

写真(6)

## 報告書抄録

ふりがな	よつやくいせき							
書名	四ツ役遺跡							
副書名	八戸平原開拓建設事業(農道建設)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第188集							
編著者名	北林八洲晴、水谷和恵							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL.0177-88-5701							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
よつやくいせき 四ツ役遺跡	あおもりけんさんじへん 青森県三戸郡 なんごくからねあおぢしまもやはざ 南郷村大字島守字 さとうのしまど 崎ノ木沢11、13	市町村	遺跡	°°'	°°'	~		
		02-448	65031	40度 22分 55秒	141度 29分 10秒	19940727 ~ 19940922	1,680	八戸平原開拓建設事業(農道建設)に係る事前調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	3軒	土器片(前期～晩期)	石器(石鎚、石斧、磨製石斧、敲磨器)	土製品(石棒)	縄文時代中期から晩期までの集落。	
	平安時代	土坑	1基	土師器			土器は、前期から晩期まで混在して出土したが、縄文地文のみの土器が多く、主体となる時期は不明である。	

青森県埋蔵文化財報告書 第188集

**四ツ役遺跡発掘調査報告書**

－八戸平原開拓建設事業（農道建設）に係る発掘調査報告書－

発行年月日 平成8年3月31日

発 行 青森県教育委員会

〒030 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 青森市新城字天田内152-15

T E L. 0177-88-5701 F A X. 0177-88-5702

印 刷 所 川口印刷工業株式会社 青森営業所

〒030 青森市松原一丁目4-7

T E L. 0177-34-0748 F A X. 0177-74-6906